

浄土

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 毎月一回一日発行
 昭和二十四年四月十八日 運輸省(特別後承認雜誌第三五二号)
 昭和三十四年四月二十五日印刷 昭和三十四年五月一日發行

第二十五卷

第五号



五月号



新刊 浄土トラクト

大正大学教授 佐藤賢順著

信仰へのみちびき B六版・十六頁 定価十五円十八円

目次

- 1. 大慈悲の仏教
- 2. 知性を超えて
- 3. 美的情感を超えて
- 4. 本願の不思議にて
- 5. すべてを包む愛
- 6. 人生は信ずる心から
- 7. お導びきのままに

大正大学教授 竹中信常著

仏教入門 B六版・三十一頁 定価二十円十八円

目次

- 1. 馬に水を飲ませるもの
- 2. 流れゆくもの
- 3. なやまとまよいのもと
- 4. すでに救われている
- 5. 信ずるところ
- 6. 仏を思う
- 7. 新しい生活
- 8. 美わしき世界の建設

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰会

振替 東京八二一八七番

浄土五月号 目次

表紙・扉絵 結城天童
さし絵・カット 加藤金一

經典 婦人とめざめ (2)

転生 ―祐天記― 成田良穂 (6)

法然上人の感化(一) 逆馬 村上博了 (5)

インド紀行 仏陀の地(一) 斎藤昭俊 (9)

実話 時子の行き先 編集部 (26)

經典解説 無量寿經 鈴木成元 (14)

高僧伝 大鹿愍成 大橋俊雄 (12)

中国綺談 魂を掬られた男 牧尾良海 (20)

大地はなびく 須藤隆仙 (23)

法然上人御一代記(二)

創作 仏壇物語 石川忠正 (30)

勸募 日記(四) A (40) M (40)

扉の御法語 (16) 仏教ものしり帳 (11)

童心仏心 (25) 伽葉目蓮阿難 (18)

日本靈異記より (29) 時は命なり (22)

真理の花たば 佐藤良智 (36)

若き女性への仏教入門(三)

浄土

四月号

あとを一廟にしむれば遺法
あまねからず。予が遺跡は諸
州に遍満すべし。ゆへいかな
となれば、念仏の興行は愚老
一期の勸化也。されば念仏を
修せんところは、貴賤を論ぜ
ず、海人漁人がとまやまで
も、みなこれ予が遺跡なるべ
し。

法然上人御法語



婦人とめづめ

かように、わたくしは聞いた。

あるとき、マハーパジャーパティイーは、二枚の布を持って、ニグロータ園に仏陀を訪れた。そして

「世尊よ、この新しい二枚の布は、私が自ら世尊のために、絲を紡ぎ、機はたを織ったものでございます。どうかお納め下さいませ。」

と、三たびくり返して申し上げた。さらに阿難も進みいでて

「世尊よ、マハーパジャーパティイーの布をお納め下さい。彼女は、世尊に対して大切な方です。叔母であり、養育者であります。しかし世尊もまた、彼女に大きな利益を与えられました。彼女は、世尊によりて、三宝に帰依し、殺さず、盗まず、邪淫せず、嘘つかず、酒をのまぬ、という五戒をまもり、四諦の道理を疑いません。世尊よ、どうぞ、彼女の願いをお容れくださいますように。」

仏陀は、この施を受けて、つづいて布施の功德を語られた。

「汝等よ、慈いっくしみの心はすべての善事の根本である。人がつねに憐愍の心を持ち、よく

その財物を布施するならば、その人は大なる功德を得るであろう。

汝等よ、世間には、よく「私には他に施す財がない」という者がある。しかし、それはその人に財がないのではなく、真実心がないのである。どんなに貧乏な人であっても、少々のパンくず位はもっているであろう。それを蟻に施すのも立派な布施である。

また、どんなに暮しに困っている人でも、まさか裸ではいまい。自分の衣の糸を一本ぬいて、他のほころびを繕うのも、また大なる施である。

汝等よ、また、まことに一物もなく、身一つであるならば、その身をもって、他の奉仕するのをたすけるがよい。それもできぬ身体であつたならば、ただ他がよい施与をするのをみて、よろこびの心を起せ。それだけでも、その人は大なる功德を得るであろう。」と。

仏陀は、居ならぶ婦人を前に、諄々と諭された。

また、かようにわたくしは聞いた。あるとき、仏陀は、ガンジス河をわたって王舎城に赴き、竹林精舎に滞在せられた。

ピンピサーラ王にクーマーという妃があつた。生れつき美しいので、選ばれて王妃となつたが、その美貌を誇って、仏陀に会うことを好まなかつた。王は、妃の前で、人びとをして仏陀を讃えしめた。妃は心をうごかした。仏陀は、妃のくるのを見て、美しい一人の婦人をそばに侍らせた。妃は、

「何という美しい女であろう。世尊は、このような美しい女達に侍かれておられる。私のような者はおそばによる資格もない」と後悔して見ていると、その婦人から若さが消えて老が現われ、遂に地に例れてしまった。妃の心は、驚きと、恐れに暗く沈んだ。

仏陀は、しずかに語られた。

「欲にまつわる者は、流れに従って下る。それは、蜘蛛の、その巣をつたわって下るがごとくである。賢者はこれを知り、貪るところなく、官能からだの欲楽たのしみを捨てて道を修おさむのである。」

妃は、深く感じて、王の許しを得て、仏陀の弟子となった。

しかし、彼女の修行は決して容易なものではなかった。青年の姿をした一人の悪魔は、

若き日に美しければ、こよなき幸ぞ、

楽の音に、花咲く園に、胡蝶と踊れ。

と誘惑した。しかし彼女は退けて、めざめの道にいそしんだのである。

病みて壊るる身にしあれば、慕う胡蝶の愚を断ちぬ。

愛は槍、欲は戟なり。近づかば、身を傷つくるのみ。いかでか楽しみと呼ばん。

欲の喜びを離れ、闇と消えたり。悪魔よ汝は敗れたり。

愚人まことを知らず、星を拝みて火を祀る。

われは無上の仏陀を拝みて、苦をのがれ、教えをまもる。

と。

逆馬

天下の嶮、八里と云われる細い山道を、三島口から荒馬をうたせた一人の坊さんがいた。馬の口取りは、両手を後でくんで鼻唄を山道に投げていた。

よく見ると、馬上にいる坊さんは、西の方うしろむきとなっていた。逆馬と云う訳である。

田畑にいた農夫、きこり達も、それに氣付いて、あれよくと驚いていた。

素衣をまとった坊さんは、ひくい声で念仏しながら、天下泰平とばかり、人々には無かん心の態であった。

それは、蓮生房であったのである。

このことについて法然上人円光大師の一代記には、

蓮生、行住坐臥不背西方の文を、ふかく信じけるにや、あからさまにも、西を背にせざりければ、京より関東へ、下りける時も、鞍をさかさまに、をかせて、馬

にもさかさまに乗りて、口をひかせけるとなん。

と伝えている。

師表法然上人のみ教えを深く信じて、少しの疑もなかったからである。

なにも知らない人々は、逆馬の坊さんを見ては、少し「たりん」かと思う人もあつたかも知れない。

併し立派な法器であり、世にある時は、

坂東武者として天下に鳴り、武功も亦無双の武将であつたのである。

一度出家したとしても、その個性まで変わるものではない。ただ師表である法然上人円光大師の偉大なる感化力によつてゐる。

大師は

坂東の阿弥陀ほとけ

と称して、その信仰には深い敬意を表し、かつは愛していたのである。

蓮生房は述懐して

浄土にも ごうの者とや さたすらん

西にむかひて うしろみせねばと詠んでいる。

蓮生は俗にある時は、熊谷次郎直実と称

し、源頼朝幕下の雄将であつた。

出家の動機については、いろ／＼ととり沙汰されている

(イ)一の谷の激戦に當つて、はからずも我が子小次郎と同年の無官大夫敦盛を討つたことに、人生の無情を痛感したとする。

(ロ)領地争いである。才許が、正しい熊谷の主張が通らなかつたから、現滅の悲哀を感じ、生きる光りを失つたとする、吾妻鏡の説である。

(ハ)京都に、円光大師二十五霊場十九番目の札所熊谷山法然寺がある。その縁起によるなれば、

敦盛を討取つた時、その名がわからなかつたので、あとの示しとして、母衣を戦利品とした。母衣を調べたところ、六字の名号が記されていたのであつた。敦盛の若年にして美事な、武将としての決心を知つた時、その六字の名号のナゾが判らなかつた。

建久四年三月になつて、大師の門徒聖覚法師を通して、大師の教誡をうけ、はじめ信仰の世界を味つたことによつてゐる。

(村上 博了)

転生

—祐天記より—



成田良穂

奥州岩城村の百姓新妻長左衛門の忤三之助は、正保三年（一六四七）十一才の秋、両親に連れられて遙々江戸は芝三縁山増上寺の寮に伯父の久我和尚を訪ねて出家得道を願ひ、その計いで袋谷の団通和尚の弟子となって名を祐天と改めた。そこで専念修行のためとて親子親類の縁を断たれ、天涯孤独の身となって刻苦精励したが、性来愚鈍の故か学業更に進まず、経文の一字一句も覚えることが出来なかった。遂に呆れ果てた師匠の団通和尚にも見放され、下僕の八助に預けられて雑用に追いつかわれる身となった。

何の因果かと悩み暮していた揚句、悲観の余り或る夜寒風荒ぶ浜辺に出て投身自殺を企てた。ところが折しも通りかかった同じ寮の善長という所化に抱き止められて懇々と諭され、又日頃親切にいたわり世話してくれる八助からも励まされて思いを新たにし、開山堂で一七日の間籠って祈念するうち、満願の夜半靈告を受け、それによって下総の成田山真勝寺に詣で、三七日の間參籠断食の激しい修行と祈願の結果、数々の奇異と共に遂に不動大明王の出現を感じし、長劔を吞まされと見て五臓の惡血を吐き出して大智を授けられ、これから後歲月と共に学才拔群、説法達弁の師となったのである。

後年祐天が団通和尚に随つて茨城飯沼の弘經寺に居た時の事であった。既に祐天の名声高く諸処の法座で常に数千の聴衆が集まったという。土浦の浄真寺の入仏供養で七日の法座を了えた祐天がその寮へ帰って来ると、その土地では浪人ながら相当名のある儒者の久保田伊織が数人の門弟を従えて待ち受けていた。

「浄真寺で祐天和尚の説法を聴聞いたし、その儀に就て問いただしたく罷り越した。」という口上である。勢いこんだ見幕にそこに居合せた僧達は、いずれも心配相な顔をしてこのことを祐天に告げると、
「たといどれ程の儒者であろうとも、必ず説き伏せて見せよう。」
と、平然とした祐天は、証人としての四人の僧達と共に早速会うこととしたのである。
「これはこれは、ようこそ揃いでおいで下され恐縮に存じます。何か私の説法に就てお判りならぬことがあるそうでございますが、何事によらず御遠慮なくお尋ね頂きとう存じます。」連日の御説法まことに御苦勞千万、先ずは滞りない首尾めでたく存するが、先日

貴僧が説かれた地獄極楽というものが実在するものならばその証拠を承知いたしたく、門弟共同推参した次第でござる。」

「それならば、あなた御自身はどうお考えですか。」

「拙者が存じようは、地獄極楽などとは坊主共が世上の人をたぶらかす渡世のための草双紙に過ぎず、強いてであると申せば、人殺し、盗み、火つけなどの罪を犯して、火あぶり、打首、遠島などの刑罰に処せられるのが地獄であり、天子、將軍、大名又は財宝に恵まれた人々が榮耀榮華の日々を過すのが極楽であって、このほかにあるべきはずがない。凡そ人間は天より性を受け、木火土金水の五行をもって躰となし、死ねば皆その元に帰するものであると思うがいかがでござろう。」

この意見に対し祐天は、広く一切経よりあらゆる例を引いて、六道輪廻や因果応報の四苦八苦の道理を説明したが、伊織は頑として承服せず、末だに地獄極楽から立戻ってその様を物語った者が一人もない以上、どんなに仏書の文句を並べたてたところが何の証拠にもならない。その証拠を見せることが出来な

ければ、貴僧の説法も一つとして信ずる訳にはゆかぬと責めつけた。その時祐天は言葉を更めて、

「あなたの申されることも一応尤もなことであり、それ程に申されるならば、死ななければ行くことの出来ない世界は別として、この人間世界にも実在する畜生道と人間との関係を証拠に御覧に入れて説明いたします。就ては私はまだ見ませんが、あなたはこの数年班の女犬を飼っておられると思いますが。」

「よくご存じで。いかにも拙者その通りの犬を飼っておるが、それがいかがいしたのでござる」

「その犬こそ、あなたが十一才の時別れた母親の生れ変った姿であります。」

「ええ、何といわれる。わが母親が畜生になったというのか。問答に負けた腹いせにこのような耻辱を与えるとは言語道断、眼前親が犬になったといわれてはこのまま聞捨てにならぬ、さあその証拠は何か。納得のゆく証拠は何か。納得のゆく証拠を見ぬ以上武士の面目、刀にかけても引退らぬから覚悟されよ。」

と真赤になってにじりよった伊織を静かに

制した祐天は

「何はともあれ、御門弟を遣わされて、その犬をここへ連れて来て下さい。そうしたらあなたもよくお解りになることと思います」

そこで二人の門弟が飛ぶように伊織の宿所へ走り、やがてその犬に縄をつけて引いて来た。祐天はその犬を広縁へあげ、その前に端座して珠数を押しもみ十念を授け、握飯を与えるときも嬉しそうに尾を振りながら、これを食べた。今度は祐天に言われて伊織が握飯を与えようとすると、不思議にも犬は伊織の顔をつくづく見つめ、高々と鳴いて両足を折り頻りに涙を流し、その握飯を食べようともしず頭をうなだれ、伊織の顔を見あげ見おろし、泪はなおもせきあえず、さも懐しそうに吠える声は末だ曾つて覚えぬ程自然に心と心の通う思がして、これこそまことに母上の生れ変りかと考えぬ訳にはゆかぬばかりに伊織は、信じ難いことながら、この不思議な有様と心境を他に説明する道もなく、名増の徳により境界の異った親子の関係が明かに示されたものと信ずる心を抑えることが出来ぬようになった。犬を膝にかきあげて、どのような

罪障があつてか我が母が畜生になるとは情ない
いと涙を催せば、犬も更に涙を流して一声鳴
いては顔を見あげ、二声鳴いては手をなめて
嬉しがる様は人間と少しも変らない。祐天は
この様を見て、

「果して昨夜の夢に仏から示された通りであ
ります。もうお疑が晴れた上からは、この犬
は畜生であっても元は母人であるのでこれを
知った以上この儘ではおかれますまい。それ
で今宵のうちにも得脱するようにいたしまし
よう。」

と、その夜別時の大念仏をすることに決め
伊織関係の八九人と寮にいる人々が犬を中心
に車座となつて一心不乱の念仏三昧をつづけ
たが、その夜も深更に及んだ頃、犬は頻りに
首をうなづいて念仏を申すように見えた。祐
天は「犬の成仏は只今だ」と言つて一層声を
励まして念仏すれば、頭をたれてこれを受け
ていたかに見えた犬は、すつくと立って身を
ふるわし、倒れ伏してそのまま、息は絶えて
しまった。目のあたりにこれを見た伊織は、
祐天からこれも皆浅からぬ仏縁によるものと
教えられ、母親が犬となつて畜生道の苦を受

けても名僧の化益で人間も及ばぬめでたい往
生をとげたことは有難いとも添けないとも言
いようもなく身にしみて感じたのである。そ
れにつけても浅い自分の智恵から高僧を罵つ
たことは申し訳ないと思ふ。深くその罪を詫び、この
犬のなきがらを手厚く葬り、次で母の菩提を
とむらうために一念發起して祐天の弟子とな
つて剃髪、名を祐山と賜り諸国を行脚して終
りに伊予の大林寺で入寂し、火葬したら五色
の舍利が現れたと伝えられている。どうい
う化学作用によるものか五色の舍利は自分の知
縁にもこの事実があつたので満更無根とも考
えられないのである。

これは祐天上人が輪廻転生を実証した事蹟
であるが、キリスト教でも或る牧師が生前の
罪によつて命終と同時に驢馬の胎内に宿つた
という話があり、このほかこれに類した多く
の物語が伝えられている。好むと好まぬとに
拘わらずこの転生こそ人生の最大問題であつ
て、すべての宗教はこれに帰結すると思ふの
である。そして法然上人の立てられた念仏門
は実にここに最も重点をおいた教えである。
恰も意になつた今宵の宿が定まつていれ

ば、風が吹こうが雨が降ろうが心おきなくそ
の日は楽しめるように、念死念仏、往生極楽
の安心決定によつてこの転生問題を解決して
始めてすべての人々が、よかれあしかれ各々
の立場にあつてそのまま現世の福楽を享受す
ることが出来るのであつて、この問題を解決
するものこそ最高最尊の宗教であると信ずる
のである。

後註

ここに用いた「祐天記」は、江戸時代に行
われたと思われる講説の聞書を今阿弥淨祐と
いう人が洒脱な挿絵と麗細な文字を以て筆写
した古書によつたものであるが、諸処に謬つ
た字句も散見され、史実と真価の程は保証し
難い。

併し、祐天上人の布教面の風貌とその頃の
法話の一端が推測出来る点興味があると思つ
たので多少訂正潤色の上一部を取上げて見た
のである。

×

×

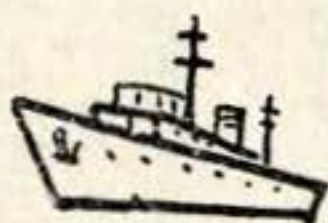
×

×

×

仏陀の地

二



斎藤 昭 俊

ナーランダ

三百年から四百年位続いた大乘仏教の中心地であり、大規模な大学がここに築かれた。

七世紀にはここに中国僧の三蔵法師が留学していたところで、二階、三階に築かれているものもあれば、善光寺の階段めぐりみたいなものもある。大体中心に大きなホール、四方

を個室で囲んでいる正方形の僧院である。何千という学生、僧侶がここに集って学んだという。正に大乘仏教の学問の中心地であったことが分る。これらの僧院は八つ、これに對称的に塔が六つ、七つ造られてあった。形は色々あるが、仏陀を祀ったお堂であろう。イ

ンドネシアの王の寄進したものもある。現在パリー研究所、実名はマハ・ナーランダ・ビハールがあるが、学生は五、六十人で、隣の諸国から来ている。大谷大の桜部さんが日本語と中国語をここで教えている。九大の戸崎さんも二年もここに学んで帰った。この博物館には小さな銅の仏像、九世紀から十一世紀のものが並べられている。

ラーシギリ

今のラーシギリは温泉地である。この温泉は釈尊の時からあるものだが、見渡すと五山に囲まれた旧王舎城跡は緑の海である。第一結集が行われたという七葉窟のある丘から眺

めると全くの緑である。丁度この丘の麓、つまり旧王舎城北門のところに温泉がある。その北門の手前に竹林精舎の跡とカラングダ池がある。その近くに新竹林精舎と称して日本山妙法寺がある。その裏手に提婆達多の石窟がある。そこには今、回教徒の温泉がある。北門から旧王舎城跡に入ると新国道がガヤまで続くのだが、蛇寺(マンヤール・マート)がある。ここを右に入るとソンプンダール窟に至る。これは岩を切り抜いて造った大きな岩室で、宝庫に使われていたという。又蛇寺にもどって、南に行くと、ビンバサル牢獄がある。ここからちよつと行つて、右に折れて暫らくして丘をのぼるとこれが靈鷹山である。ここから見ると下の池には虎が水を飲むにくるという。この山で法華経が説かれたという。ここに登って暫し想いをめぐらす。又もどって更に南に行くとわだち跡というのがあつた。これは昔使用していた道路で、はつきりとしたわだちの跡が残っている。ここから更に南に行くと旧王舎城の南門がある。全く大規模な城であつたわけだ。ここからの眺めもすばらしい。

仏滅のクシナガラ

ペナレスを夜の十時十五分発のゴラクブール行が十一時近くになって出て、デオリヤについたのが予定通り次の朝の四時十分、待合室で暫らく休んでいると或る親父さんがやって来て色々世話をしてくれた。この人はグプタ・ミスラという。毎朝駅にきて外人がいると色々世話をする。お茶(牛乳入り紅茶)を飲ませたり、クシナガラ行のバスに乗せてくれたりする。これは趣味でもう千人もの人に会っているという。私もこのことは宇野さん(現京大講師)から聞いていたが、私もお世話になった。このデオリアから七時半のバスでクシナガラに向う途中延々と一時間も立派な並木がつづく。補装された道の両側に相当年数のたった木が立っている。暑い国の道には日蔭をつくる並木は全く必要なもので、それぞれ旧藩主達によって作られたものである。クシナガラには九時に到着。ここではピルラ・テンブラのマナーチャーにお茶から食事、昼寝まで一切お世話載いた。そしてクシナガラ、ニルバーナ・テンプルとメーン・ス

トーパ、それに僧院のあとビルマ寺、支那寺とに参拝出来た。仏陀二千五百年祭のあとで、すっかりよく整って整然としている。仏陀がここでおなくなりになった。沙羅双樹の間で、今ニルバーナ・テンプルの前に若木が二本たっている。庭園には沢山苗木が植えら

れている。冬の太陽のもとに私は長い間ここに佇ずんでいた。

ルンビニ園



夜の十一時近くノウガルにつく。この待合室で翌朝までねる。朝起きて見ると隣りの待合室に日本人の坊さんと連れがいた。全くの偶然で坊さんは日本山の渡辺さん、つれは横浜国立大の大岡先生、欧州の建築を見て廻り、今インドの建築を見て居られる由。待合室のチョキダール(不寝番)は僕のことを渡辺さん達にドイツ人だと告

げていたとのこと。ノウガルから八時のバスにてルンビニにつく。長い間荒れるにまかせていたので、恐らく何もなくなっていたことだろう。釈尊の産湯をつかったという池があり、アシカ・ピラーがたっている。小さい彫刻物や像がときどき見つけられるというが、不幸にして何も見つからなかった。仏誕の地の石を拾って持つて帰ることにする。イ

ンドの国境からネパールに入ってここは五マイルばかりの処だが、全然インドと変っていない。住民も何も同じ。今ここに小学校が開かれているが、教えられているのはヒンディである。ネパールはインドなしでは生きて生かれないのだろうが、もともとこの地はインドに属していたところである。英国支配当時グルカ兵の功績によってこの一帯がネパールに与えられたのだという。釈迦族の王城のあったカピラパツはここから程遠くない。通知をしておけばこの王が象をもって迎えに来てくれるとのことであった。

今このネパール・ゲスト・ハウスの掛りをしていくクリシナ君は親切な青年であるが、二回会う機会があった。ルンビニに入る道路はネパール領に入ったとたんに悪くなっているが、近き将来これもよくなることだろう。ルンビニ園は本当に荒涼たるところである。ルンビニを緑の公園にしたいとは訪れるものの等しく想うところであろう。

サヘート・マヘート

ノウガルで渡辺さん、大岡先生と別れて夜の十時四十五分発でたって、夜中の二時半に

バルランプールにつく。駅の待合室で五時までねる。六時にサイクル力車でスラバスティに向う。ここは祇園精舎の名で知られている仏教徒にはなじみの深いところ。バラランプールから十一マイル、往復三時間を要するが、リキシャ賃は四ルピー（三〇〇円）である。スダッタ長者がコーサラ城外のジュタ王子の庭園に目をつけて、買いたいと申出たところ、何回も断られたが、是非釈尊のために建立したい寺はこの地よりないと懇望した結果、王子はそれでは黄金を敷きつめた場所をその黄金と引きかえに土地をやるうというのと、長者は即座に引受けたという。この地はコーサラ城跡と同様少々小高くなっている処に、僧院とストーパの跡がある釈尊が二十八回もの雨期をここで過されたという土地。感慨深く頭をたれて釈尊に敬礼する。この地から少々離れたところがコーサラ城のあと、その跡はジャングルで何もなくて只ジャイナ寺とヒンドゥー寺があるだけである。ラーシギリの王舎城のあととも緑の灌木の海であった。こういうところに来る度に古代の遺物がないものかとキョロ／＼するのであるが、浅間しく人間味である。

仏教ものしり帳

韋駄天 イダテン 私建陀というのが正しい名前、インドの天界を守る三十二将の一である。この神は天性聰明で行状も極めて清浄、一切の欲楽を離脱し、仏の命令によって仏法を護り、東南西の三方の地方を統護する。古来、禪家の庫裡には必ず堂塔伽藍の守護神として此神を祠つる。形像は甲冑を着して両手に宝剣を捧げた勇将の姿である。

釈尊がおかくなつた時、捷疾鬼という鬼が仏の齒を一本盗んでにげ出したのを、韋駄天が追いかけて無事にこれを取戻して来たところから、早く走ることを「イダテン」走りというようになった。

この様に仏教用語には通常我々が使つて、一般化されているものが数多くある。といふことは仏教の伝統の深い事を意味する。

★大鹿愍成★

浄土宗で、古今を通じての唯識学のオーソリティーと言われた人は誰であろう。大鹿愍成其の人であった。彼は安政四年（一八五七）

六月廿三日、尾張国海東郡神守村宇治に大鹿良造の四男として生れ、幼にして岡崎随念寺の加藤亭愍の弟子となり、長ずるに及んで芝増上寺の学寮に学んだ。江戸では初め岸上恢嶺について宗乗と唯識を学び、唯識こそ我が意を得たりといつて、当時東に於ける唯識の大学者と言われた時宗の学僧元山実弁の門を叩いて攻学することになったが、時に実弁の彼に対する期待は大きく、愍成が何かの理由で休むようなことがあると、「今日は愍成が見えておらぬから」といって、講義をしなかつたという。それ程、手塩にかけた愍成として宗門にぞくする人ではなかつた。

明治十一年（一八七八）秋のこと師表

何に学問に精出し、苦学をつづけられたか知ることができよう。

と仰いだ恢嶺が西部大学林の監督となつて西下するに当り、

越えて明治十八年には三河に帰り、師籍随念寺に住することになった。愍成二十九歳の時のことである。以来二年ばかりの間、学問を志さず三十余人の人達を集めて、仏教講座を開いていたが、同二十年七月の浄土宗の学

実弁の留むるのも聞

を制定まり、九月浄土宗本校が開かれるや招かれて教授となり、同三十一年四月には浄土宗

かず、随從して入洛したが、幸いなることに

専門学院、三十八年四月には宗教大学の教授

京都には泉涌寺の佐伯旭雅と初瀬の常林坊快道が西の唯識学者として君臨していた。許されて両師の門に入り孜々としてうむことな

に就任して唯識を講述した。所が同二十六年の秋、ある理由で一時三河に引き上げられて

く、居を仁和寺の附近にあった黄檗宗の寺に

しまわれた。若冠三十七歳とはいえ、唯識で

占め、夜は此の寺にあった湛慧の著書を筆写

は押しも押されもせぬ第一人者。「大鹿教授

し、昼は旭雅や快道のもとに通つて聴講した

が三河に引かれたとなれば、唯識の講座は三

が、彼は講席にはべるといふばかりではな

河に移せ」と学生等はいきまき、その結果、

く、常に疑問をひっさげ、質問を發し、その

学生の中には態々彼のあとを追つて三河に赴

論争は深更にまで及ぶことも度々であつた。

き、教えを乞うた人も何人か居り、荻原雲来

黄檗の寺に宿所を定めたのは唯識の大家とし

や林彦明もその一人であつたという。

て著名な湛慧の著書が豊富にあつたからで、

同三十一年には専門学院が百万遍知恩寺に

当時黒田真洞や武田芳淳も同宿し、自炊生活

置かれることになり、愍成も此処に就任した

をしていたが、金のない時には終日食もとら

が、時に講義したのが、何と「比較宗教学」

ずに、筆記に終始し、別にひもじさをうった

えることもしなかつた。これによつても、如

であつた。今でこそ、別に奇異に感ずるようなものではないが、当時としては画期的な学問であつた。自己の批判一つで容赦なく、ぐんぐんと批判してのけたので、学生達は驚嘆したのであり、これが極めて好評を博したので、他宗門でもこれを真似るという有様であつた。或時は、ドロビスの論理学を読み、仏教の因明と比較して見た時、因明の方がどれ位すぐれているか知らないと思破したこともあり、数学も好きでどんな難題でもやつてのけたという逸話も残されている。

しかし彼は唯識に於て一頭地をぬきだしてゐるばかりではなしに、華嚴もやれば宗乗もやつた。「唯識をしっかりとやつてさえいれば、華嚴はひとりでわかるものだ」と述懐された事もあつたが、或日のこと、彼の名声を聞いて、遠州からはるばる京都にいる愍成をたすねて来た真宗の僧侶があつた。僧は今まで幾度びか講説をきき、書物をひもどいたが、安心を得ることは出来ない。そこで彼に「どうも未だ多くの名僧知識の門を叩いて見



人上成慈興大學勳正僧權

たが、安心は得られそうにもない」と話を持ちかけたので、愍成は此処とばかりに、「一枚起請文の外に理窟がいりますかいな」といつて応酬し、種々と一枚起請文の要を説いたのであつた。すっかり其の説に共鳴した僧は、立ちどころに安心をかためたということである。

明治四十四年には黒田真洞の後をついで宗教大学長になった。真洞は愍成よりも二歳の年上であつたが、兩人は親しく交わり、一時京都で同宿したこともあつた。大正三年三月その職を辞し、安土の浄嚴院に隠棲し、同年八月黒谷金戒光明寺法主に推され、六十二

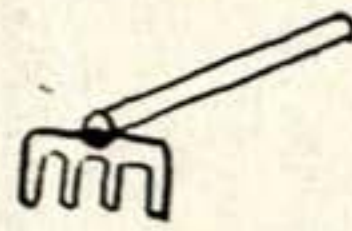
世の法燈をついだが、この頃から漸く中風症があらわれ、翌八年六月叡山大学講師となり、九年十月京都帝国大学の講壇に立たれた頃には病氣も可成り進行していた。帝国大学では見るもいたいたしい姿で因明を講じたが、その講席には教授の人達も顔を見せ、後日内藤湖南博士は、「もう一度、元気な姿の大鹿さんから唯識が聞きたいものだ」と友人達に、もらしていたということである。彼の人となりについて、福島愍雄は「師容貌雄偉にして、器宇豁如、一たび教壇にたつや、威風堂々、ために学理一層の森嚴を加ふ。然るに師の生平は洒々磊々、吾生を待つに友誼を以てす。威あつて猛からずとは夫れ先生の謂乎。師の京師に在るや、蒲団を被て洛中を潤歩す。脱塵の風慕ふべきあり」（芹葉集）と記している。

彼には六花真哉、小林瑞浄、三枝樹貫道、大島徹水、福原隆成、滝川秀音、鈴木豊善というような七人の弟子があり、世に大鹿門下の七羅漢と呼んでいる。かくて大正十四年十一月十八日には、六十九歳を以て示寂せられた。法名は広蓮社深譽上人心阿無涯底愍成大和尚

（大橋俊雄）

無量壽經

經典解説(三)



ついでこの間「十戒」という映画を見た。

この映画はいうまでもなくモーゼの十戒を説いたもので、西洋の忠臣蔵というべきものであろう。製作費に何億円かをかけたらしいが、現在では何億円かの黒字だそうである。全くアメリカでなければ作れない映画であろう。それにしても衣装や建築には学問的考証がなされ、美しい色彩と共に四時間近い長時間を退屈させずに引張って行くテクニクは見上げたものである。ストーリーそのものは極く簡単であり、現代人には何としても信頼出来ないこの物語が何故あのように受けるのであろうか。それはユ

ダヤの英雄モーゼ

の物語の面目さ

さることながら予

言者としてイスラ

エル人を指導し、

シナイ山上で十戒

を垂れた神秘性

が、西洋人の思想

に合うのである

う。聖書の宣伝も

大きな効果には相違ない。ともかくこの十

戒は何回も映画化され、劇化されて今日に

至っているが、公開するたびごとに大入だ

そうで、決して赤字にはならないとのこと

である。こうしてみるとまさに日本の忠臣

蔵そのものである。

こんなことを考えながら家に帰り、無量

寿経を読んでみた。無量寿経と十戒の比較

等は考える方が無理であり、馬鹿げたこと

でもあるが、非常に面白いと思った。とい

うのは、西洋における思想と東洋に於ける

それはあまりにも異なるからであった。そし

て無量寿経が慈悲に満ちた有難いお経であ

ることをつくづく感じさせられた。

無量寿経が日本に伝えられたのは今から

約千二百年前で、聖徳太子の時にはすでに

あった。平安中期以後になり浄土教が盛ん

になると観無量寿経、阿弥陀経と共に広く

一般の人々に信奉され、法然上人は浄土三

部経と名づけて根本聖典とされた。

無量寿経には釈尊が王舎城外に聳える靈

山で一万二千人の弟子達を前に説法された

ことが記されている。その説法というのは

こうである。アミダ仏の前身である法蔵菩

薩が「すべての人が清い社会で正しい行な

いが出来るように」と長い間浄土の設計を

考え、四十八の誓願を立て、それを完成す

るためにまた長い間無量の修行をしようと

もに人にも教えて行わせた。そして正しい

立場を得る修養に努めた結果アミダ仏とな

って、西方に浄土を完成されたというので

ある。この完成された浄土はあまねく世界

に知れわたって称讃される浄土である。そ

して誰でも何時でも行くことが出来るし、

また現実にはアミダ仏に見えることが出来る

というのである。しかし浄土に往生するの

には、おごりたかぶったり、怠け心があつてはいけなない。素直な心でアミダ仏の仏力を信ずるより外はないのである。「極楽があるから信するのではない。信するから極楽があるのである。」それには念仏が第一である。すなわち「心をこめてアミダ仏を信じて、西方浄土に生れようと志向して名号を念ぜよ」ということなのである。そしてただ一回でも心をこめて浄土に生じたいとアミダ仏を念ずれば浄土に生ずることが出来るというのである。これを聞いた全ての人々は自分もその正しい修行をして浄土に往生することを誓い、非常に喜んだことが記されている。この経は、アミダ仏が誓願を立てて浄土を完成されたことが主になっているから「本願の経」ともいわれる。

それはともかくとして、全体のポイントとなるのは聞名の功德ということである。浄土の外にある凡夫や菩薩が、ただアミダ仏の名を聞いただけでもその人たちを仏道へと向わせ、清い社会を作るために、正しい行をするはたらきを増進させようとするのである。だから念仏をするのも、読経を

するもの、自分の功德ばかりではなく、知らず知らずのうちに聞名の徳を作っているわけである。その意味ではお経を聞くことも聞名の功德である。無量寿経は信仰のお経であり、その中心となるのは四十八願中の十八・十九・二十の三願である。その中でも十八願は念仏往生の願といって信仰の中心となる重要なものである。

設し我れ仏を得たらむに、十方の衆生至心に信樂して、我が国に生ぜずば、正覺を取らじ、ただ五逆と正法を誹謗するをを除く。

これは安心といわれ西方浄土へ往生するものの心がけを記したものである。すなわち「至心」とはうそのない真実の心で、「信樂して」とはアミダ仏の救済力を深く

信じ、「我が国に生ぜんと欲して」とは、西方浄土に往生したいと願う心で南無アミダ仏と称えることである。しかし父母や仏教の聖者を殺したり、仏教の教団を破かいしたり、さらに仏身をきづつけて血を出したり、仏教を誹難してそしるというような五逆罪を企てたり、実行している人は、往

生を願っても浄土に往生が出来ないというのである。ここで考えられることは、心をこめて一回でも名号を称えれば往生出来るといっているのに、何故但し書きがついているのかということである。誰しも不思議



に思うところであるが、観無量寿経には、これらの罪人も改悔した者は勿論往生を許すといっている。だからこの十八願の但し書きは、念仏者に罪を犯させないための警告とみるべきである。如何に慈悲深いかこ

れによって明らかであろう。だから法然上は十八願をアミダ仏が選んだ本願中の王といて賞讃されている。念仏往生を願う十八願相当の人は、当然発菩提心がなされるから十九願の来迎もあり、二十願の宿善を重ねて目的を達することが出来るわけである。だから四十八願の中で三願が別に立てられてはいるけれども、念仏をすることによってこれらの三つはかなうことになるのである。

モーゼはイスラエルの奴隷の子として生れ拾われてエジプトの王子となるのであるが、後にそのことがわかり、王姫の止めるのもきかないで、自ら奴隷となって都市造りに従事し、遂にはエジプトから追われ、長い間砂漠をさまよった末、やっとの思いでシナイ山の麓につき、牧場の娘と結婚し、一子をもうけて楽しい生活を送るのであるが、ある日のこと突然神のお告げによって予言者となり、イスラエル奴隷開放のためにエジプトに出発した。そして身に危険を感じつつエジプトの国王と幾度も論議を闘わしたが何しても奴隷開放までには行

かなかった。そのうち神の恵みによって天変地変が相次いで起こり、国王の息子も遂に死んでしまった。そこで国王も深く感じイスラエルの奴隷を開放するのである。

モーゼはエジプトを脱出する時、神ヤハウェ（イエホヴァ）の信仰を組織立てて人民に伝えた。一方開放された奴隷達はモーゼに率いられて一路故国を指して帰るのであるが、途中、モーゼがシナイ山に上って十戒を授かる間にすっかり邪宗教にとりつかれ、馬鹿騒ぎを続けるのであった。そこにモーゼが下山して奴隷達を取り沈めるのであるが、奴隷達は神の罰を蒙り、長い間砂漠をさまよう結果になったのであった。

一方無量寿経の方は、一国王が出家して法蔵菩薩となり、四十八の誓願を立て浄土を完成し、アミダ仏となって多くの人々を救済するというのであり、そもそも出発点から異っているのである。無量寿経は十戒に見えるような他の教えは何も入れないという考え方は全くない。常に全ての人々を対象とし、清い社会を作り、正しい行動が出来ることを目的とし、名号を聞いたただ

扉の御法語

法蓮房は、すでに病篤い上人の枕許にすんで尋ねました。「古来の先徳には、みなそれぞれの遺跡があります。ところが上人には精舎一つお建てになっていません。御入滅の後で、どこを御遺跡とすべきでしょうか。」

この問に対して答えられた上人のお詞が、扉の御法語です。

これは勅修御伝第三十七巻にあります。この巻は建暦二年正月二日から御帰終までを記したものです。衰弱された上人は、身を横たえながら常に高声に念仏され、睡っておられながらも、「舌口とこしなへにうごく」とある通り、お念仏を申されていました。

正月三日に法蓮房が御遺跡のことを尋ねたのに対し、上人が「されば念仏を修せんところは、貴賤を論ぜず、海人漁人がとまやまでも、みなこれ予が遺跡なるべし」と申された御詞は、けだし上人御一生を貫く御信念でありました。

建永二年二月に住蓮安楽の事件があり、

けでも浄土に往生出来るいとう本当に広い立場から考えられたものである。そして極悪人でさえもその罪を改悔したものは往生を許すというのである。そこには十戒に見られるように神罰を受けて何年もの間砂漠をさまよったり、或は天変地変が起って人々が苦しむというようなことは絶対にならないのである。それは最初からあらゆる人の苦しみを救済するために、願を立てて浄土を完成されたためである。だからそこには戦争もなければ、世間的な邪欲な歡樂もなくなるわけである。すなわち浄土は、真理が基準となった施設や行為や事業が至上の樂として行ぜられているところであって、必ずしも人間的快樂があるところとは見られないのである。

それはともかくとして無量寿經は高大な精神のもとに慈悲に満ち満ちており、あまりにも完全すぎるのでかえって感受性が弱いのではないであろうか。十戒は比較的荒けずりではあるが、ストーリーそのものに種々なる迫力があるので、西洋人は勿論のこと、東洋人にも物語としては受けるので

あろう。そして中に盛られている想像もつかない物語は、この迫力によってカバーされているのであろう。もっともこの物語は歴史上の實在の人物をテーマにした点その迫力が一層強いのはいうまでもない。無量寿經の中に入っている多くの物語も、その一つ一つが全て劇化される要素を含んでおり、文学的にも非常に香りの高い脚本が出来るに相違ない。いやむしろこれらの物語の全てが断片的に東洋の思想に入れられ、多くの改作が出来上っていることは事実である。これらの物語を一貫したものにまとめて劇化したならば、これこそ万人に受ける東洋の忠臣蔵が出来るに相違ない。いや必ず出来ると信じて疑わないものと信ずる。ただ無量寿經で問題になるのはあまりにも時間がかけ離れていることである。そこに迫力の欠ける点があるのであるが、それは古代インドの人々が、人間力を離れた美しさで精神上的の清浄さを表現しようとするため、仏教經典もまたこのようにして作られたからである。

(鈴木成元)

引続いて上人に対して遠流のことが決定しました。これについて門弟一同は大いに嘆き、中には「一向専修の興行をとどむべきよし奏したまひて、内々御化導有べきや待らん」とまで申し上げました。すると上人は、「流刑さらにうらみとすべからず」といわれ、かえって上人は「念仏の興行、洛陽にして年ひさし、辺鄙におもむきて、田夫野人をすすめん事、年来の本意なり。しかれども時いたらずして、素意いまだはたさず。いま事の縁によりて、年来の本意をとげん事、すこぶる朝恩ともいふべし」とぞん訴のためにふりかかった禍を少しもうらみとせず、これをすこぶるの朝恩であるとされました。そして遠流の途中でも多くの人々を化導されたわけです。(勅修御伝第三十三、三十四)

この尊い上人の御信念が、「あとを一廟にしむれば遺法あまねからず、予が遺跡は諸州に遍満すべし」と申されたものとなっているわけです。

罪にある「念仏の興行は愚老一期の勸化也」とのお言葉を併せ拝見しますと、上人の御信念にただ掌を合せるばかりであります。

老、という言葉を御存知ですか。

(迦)

意味は、織田仏教大辞典によると「釈迦は八十の寿を保ち、老比丘の相を現すれば迦老と云う」としてある。

これは晩年の釈尊のことを指すが、二千年五百年余の昔、未だ健康管理の発達してない時代に、「迦老」と尊ばれるまで、長寿を保たれた事は、現代に於ける我々の平均寿命とは雲泥の差がある。

古来より東洋の聖人と釈尊と並んで称せられる孔子にしても、長寿を保たれた、そして孔子は、自から称して、「我十有五にして学に志し……七十にして心の欲する所に従いて矩規をこえず」と。

我々の社会では長寿を保つ事は比較的に易になった、がしかし後の世に文化遺産として人格を残すことはむづかしい、与謝野晶子は歌っている。

恒所より営なみつくれる殿堂に

我れも黄金の釘一つ打たん

(T)

(葉)

蔭も明るいベープメントを靴音も軽ろやかに腕を組んですぎて行く、アベックの姿の目につく季節になった。

空を見れば、碧空に泳ぐ鯉のぼりも、矢張り黒と赤の二人連れ。

公園のベンチも、喫茶店のボックスも、みんなみんな二人連れ。

どおして、人間とは、こうしてみんな二人連れなのだろう。阿波の鳴戸で名声い、四国巡礼のお遍路さんのかぶる笠にも、同行二人と書いてある。仏さまと二人づれなのだ。ひとは一人ではいられない。いや、二人の人が双方から支え合っている姿が、「人」という字なのだ。一人でき、敢然と生きて行ける人は珍らしい。「君子は独りに慎む」とかや。まことに、一人でいることはむづかしい。

坊さんを「僧侶」というが、侶の字は「つれ」を意味する。お釈迦さまも、いち早く人情の機微をお察しになって、坊さんをひとりぼっちにはなさらなかった。(N)

(目)

上のひとに対する、尊敬の念がうしなわれ、目下のものに対して、おもしろいやりの情がなくなり、人情がトゲトゲして何かしら住みにくくなった。

個人主義的感情がゆがめられ、オレさえよければ的な物の考え方が横行しているせいかもしれない。温い思いやりの情愛は、かつてのイブツ化している。といって、今更浪曲的義理人情をスィショウしようというのではない。

大体、一つのものごとにしても、単独では成立つものはない。いくたの縁を必要とする。二つ乃至無数の縁がよく統一してできあがるのである。

人間社会も男女、老若、上下、さらには左右、保守、革新と相対しているが、お互に目くじりを立てずに、大らかな心で調和してゆくなら、もっと居心地はよくなることであろう。健全なヒューマンリレーションこそそのぞましいのである。(A)

(蓮)

華、たんぽぽの花吹く頃と云えば、さわやかな五月を象徴する。空には「こいのぼり」が泳ぎ一段と人の気をやわらげてくれる。ハイキング、ピクニックには恰好のシーズン、又この月はなんと行事の多い月でもある。一日一メーデー、三日一憲法発布記念日、五日一子供の日……とつづく、よって映画会社の方ではゴールデンウィークなどと称する。

この時常に感じるのは、何々記念日等の休日は、本来休日なのであるから、その記念日は、他人にそくばくされることなく鋭気を養い、日々仕事に追われてストレスを起している頭を休め反省したらと思うが。

世の中は問々ならぬ、何々記念日には、その記念日の行事に追いかける。休日は、休日である事を考えれば、いくらか良い智恵が浮ぶのではないか、ストレスの連続ではやりきれない。

(T)

(阿)

波介の念仏と法然の念仏と、いづれがすぐれておるか。

こうお弟子に問いかけられた法然上人は、考えようによると、まことに皮肉なお方のように感じられる。

念仏というものが、人によって唱えられるのではない、阿弥陀仏の本願力を信じて、唱えさせて頂くものであることを、弟子達に深く教えたかったからの出問ではあったが上人程の深い信仰にある者のほかは、どおしても、人間の側からものを考えがちである、自分が信ずる、自分が唱える。だから、唱える人の機根次第で、念仏の徳もちがって来る。当り前ならこう考える。そして、そう答える。だから、法然上人に叱られたのである。

信仰というものは「理窟ではない」とよくいわれる。全くその通りで、普通の考えで割り出せぬものである。といって、理窟を無視すれば、それがそのまま「理窟ではない」という理窟」になってしまう。用心用心。

(N)

(難)

事業である、英文仏教百科辞典の編纂が着々準備されている。これは、マフラ、セーケーラ博士等が中心になって発案されたもので、セイロンに本部を置くものである。とくに。世界的レベルにある、日本の仏教学会の学者が、それぞれ分担執筆し、編纂事業の推進的力を發揮している。

いま、アメリカをはじめヨーロッパに於いては、東洋への関心、殊に仏教熱が非常にさかんである。それは、西洋思想のゆきづまりを感じとっている学者、知識人をはじめ、一般の人々の目は東洋にむけさせている。それに答えるためにも、この仏教のエンサイクロペディアの果す役割は大きい。

現在、日本では「ブッダ・ジャヤンティ」、釈尊二千五百年を讃える会が外国の代表団を迎えて、盛大に催されているが、仏教が世界のブタイにおどり出て、仏教の名のもとに平和の光をかかげるためには、どうしても、現代的表現と言葉を通じて伝える必要性を痛感する。

(A)

“魂を拘られた男”

牧尾良海



丁度その時、一匹の空馬を曳きながら別の馬に跨って後の方からやって来る者があった。その人の馬は足掻きも速く、見るからに逞ましい逸物であった。その人物は追い抜きざまに裴琰達の一行をふり返って、さも気の毒そうに見て通りすぎようとした。

裴琰はそこで早速、

裴琰は、孝廉科出身の少壮官吏で、彼の実家は洛陽にあった。

ある年の五月のことである。端午の節句にもなるので、久しぶりに両親に面会すべく、

西の鄭地方の任地から賜暇帰省する道中にあった。ところが、乗っていた馬がやぐざで、

脚を痛めてびっこを引き始めたので、午後も遅くなった頃、ようやく石橋にたどりついた。ここで馬を降りて、手綱をひっぱりながら歩き出したが、心の中では一刻も早く家へ帰りつきたくてやきもきしていた。

入りになるおつもりではありませんか？」と尋ねてみると、

裴琰は、もっけの幸いだと思って、

「私は裴琰という者です。一つ是非お縋り申して、貴方様の余力をお借り致したいのですが、お聞きいれ下さいましょうか？」と前置きして、どうにも困っている実情を訴

えた。

その乗馬の人は、彼の話を聞いて承諾してくれたが、

「但し、都の城門の所までということにして下さい。それならば私の馬をお貸ししましょう」

と言うので、裴琰に勿論異議のあろう筈はなく、城門までと約束した。彼は二人の従者に、

「お前たちは、つかれているこの馬をゆるゆる曳いてやって、今夜は白馬寺の西の從兄の寶温のうちに泊めてもらい、明朝ゆっくり帰って来るといい」

と言いつけた。

そこで、借り受けた馬にひとむち当てて走らせ、間もなく上東門の所へ行きついたので、馬をその人に返し、厚くお礼を述べて別れた。乗馬のその人はまたたく間に馳け去って行った。

裴琰の実家は都を流れている河の南部地区にあったので、陽も半分がた沈んでいる薄暮の町を急いで歩いたが、家へついた時にはもう四辺がすっかり暗くなっていた。



大地はなびく

須藤隆仙

偉大に、最も偉大に

二十四才の時清涼寺に参籠された上人は、
学僧を尋ねての旅に出たのであった。

法相宗の蔵俊、三論宗の寛雅、華嚴宗の慶雅、等、当時としては各宗最高の学僧に会ったのであるが、上人の真に求むる道を発見することができなかったばかりか、かえってこれらの学僧は上人の学徳に驚き、上人を逆に讃仰してくるような状態であった。そのため上人は再び黒谷に帰ったのであった。そして、この報恩蔵で最後の真剣な「道の探求」が始まったのである。万人が真に救われる道、その道は何か、それには先づ自分自身を知らなければならぬ。ここに上人の万人救済は、源空という自分自身の救われる道となつて、強い求心的力となつて内部へ内部へと迫つていったのである。

真理とはきびしい現実である。しかもその現実とは、あくせく／＼と泥沼の中を右往左往している自分の姿である。そして又その自分自身が、罪深い、アカによごれ果てた泥凡夫なのである。泥沼の中の泥凡夫、情けない

話であるがこれがたった一つの自分だったのである。この現実の前に、このきびしい現実の前に、誰が一体「それは違ふ」と否定できるであろうか。上人はこの現実の人間の姿を、痛く痛く自分自身の上に見出されたのである。

「凡夫の心は物に従いて移りやすし。例えば猿猴の枝につたうが如し。誠に散乱して動じやすく、一心静まり難し。無漏の正智何によりてか起らんや。若し無漏の智劍なくば、いかでか悪業煩惱のきづなをたたんや。悪業煩惱のきづなをたたずば、何ぞ生死繫縛の身を解脱することを得んや。悲しきかな、悲しきかな。如何せん、如何せん。ここに我等如きは、既に戒定慧三学の器にあらず」(猿の動きのうに散乱して、落着くことを知らない凡夫の心、無漏という悟りの心など到底出てくるものではない。悟りの心がなかったら、どうして悪業のもとたる煩惱を絶つことができるか。煩惱を絶つことができなくて、どうして生死の苦しみを解脱することができるか。悲しいことである。恐しいことである。私達は既に仏教の戒めや、落着や、叡智、な

もちやの様に心得おる。明日になったら尊父の昆明池神に手紙をやって、七郎めを答^かうたせるように言おう」

と言いつつ、裴琰の方へやって来た。矢袋を持った男は裴琰を招きよせ、一緒にまた上東門のところへ出て、門の隙間から通りぬけると白馬寺の寶溫の家へ行った。奥へ通って一室をのぞくと、二人の従者がぼんやりと一人の男の横わっているのを見守っている。よくよく見ると、横になっているのは裴琰自身である！ 矢袋の男は、驚きあきれて立ちすくんでいる裴琰の眼をつぶらせると、後からどんと背をついて押し出してやった。

この瞬間、裴琰ははっとしてまるで蘇えた様な気がした。二人の従者も驚きたまげて言った。

「昨日、石橋までやって来ましたところ、若旦那さんは急に具合が悪くなられて、妙なことばかり口走られるので、ひどくなられたら大変だと思って、このお家へ泊めてもらうことにしたのです。ところが、ここへ着くなり若旦那さんの息が絶えてしまったのです」

時は命なり

本会支部として活躍されている文京区講安寺（住職池田立基師）の檀徒総代に須賀利雄（四八）さんがいる。須賀さんの先代は、高級中華料理で有名であった上野公園兩月莊を經營されていた方である。この先代の七回忌をこの程厳修されたが、そのときの引物として参列者一同に「時は命なり」というパンフレット、置時計、本誌「浄土」を配って、さすが須賀さんらしいと感心された。

この「時は命なり」の一節に次のような一節があった。即ち

「いま私共は、この限り有る命の上に立って、その与へられた時を無駄することなく十二分に活かしつつ『永遠の大生命（南無阿弥陀仏）』の中に生きる可く、静かに時をきざんで往きたいと思ひます。

何事にも安んじて喜びと感謝の人生を味いつつ生きる処、即ち『安心立命』の境がいかに立つてこそ、初めてこの『時は命なり』という事が泌々と思ひ当るのではないでしようか」

裴琰は、事の意外さにただもう驚歎するばかりであった。暫らく経つと、気分もすっかりよくなったので、あらためて従者たちと実家へ帰ったということである。

唐・薛用弱「集異記」より。





大地はなびく

仙 隆 藤 須

偉大に、最も偉大に

二十四才の時清涼寺に参籠された上人は、学僧を尋ねての旅に出たのであった。

法相宗の藏俊、三論宗の寛雅、華嚴宗の慶雅、等、当時としては各宗最高の学僧に会ったのであるが、上人の真に求むる道を発見することができなかったばかりか、かえってこれらの学僧は上人の学徳に驚き、上人を逆に讃仰してくるような状態であった。そのため上人は再び黒谷に帰ったのであった。そして、この報恩蔵で最後の真剣な「道の探求」が始まったのである。万人が真に救われる道、その道は何か、それには先づ自分自身を知らなければならぬ。ここに上人の万人救済は、源空という自分自身の救われる道となつて、強い求心的力となつて内部へ内部へと迫つていったのである。

真理とはきびしい現実である。しかもその現実とは、あくせく／＼と泥沼の中を右往左往している自分の姿である。そして又その自分自身が、罪深い、アカによごれ果てた泥凡夫なのである。泥沼の中の泥凡夫、情けない

話であるがこれがたった一つの自分だったのである。この現実の前に、このきびしい現実の前に、誰が一体「それは違う」と否定できるであろうか。上人はこの現実の人間の姿を、痛く痛く自分自身の上に見出されたのである。

「凡夫の心は物に従いて移りやすし。例えば猿猴の枝につたうが如し。誠に散乱して動じやすく、一心静まり難し。無漏の正智何によりてか起らんや。若し無漏の智劍なくば、いかでか悪業煩惱のきづなをたたんや。悪業煩惱のきづなをたたずば、何ぞ生死繫縛の身を解脱することを得んや。悲しきかな、悲しきかな。如何せん、如何せん。ここに我等如きは、既に戒定慧三学の器にあらず」(猿の動きのうに散乱して、落着くことを知らない凡夫の心、無漏という悟りの心など到底出てくるものではない。悟りの心がなかったら、どうして悪業のもとたる煩惱を絶つことができようか。煩惱を絶つことができなくて、どうして生死の苦しみを解脱することができようか。悲しいことである。恐しいことである。私達は既に仏教の戒めや、落着や、叡智、な

どというものと無縁の者達なのである)

この悲しい叫び声は、現実のきびしさから発せられた叫び声であった。上人はこの「無縁の者達」の自覚に立たれ、この「無縁の者達」の救われる道を求められたのである。報恩蔵での一切経の真剣な閲読は実に五辺に及んだと伝えられている。

かくて遂に、その中からシナの善導大師の観無量寿経の注釈書の中の一句に、始めて、この凡夫が、そのままの姿で、やすくと救われる絶対救済の道を発見することができたのである。「我心に相應する法門ありや。我身にたえたる修行やあると」この現実の醜い凡夫が、それでもその凡夫なりに、救われる道があるかと求め得た道が、この道だったのである。

即ち、南無阿弥陀仏と口に御仏の御名を唱えることによって、その仏の悲願によって救って頂き、最高の世界(お浄土)へ、到達させて頂ける(往生)という「念仏の教え」である。

真理がきびしい現実であれば、それを救う現実も又真理そのものである。ここに上人

は「このゆえに阿弥陀ほとけ五劫に思惟し」と救われる者と、救う大慈悲との関係を発見されたのである。無縁の凡夫そのままが偽りのない真実の姿であり、その真実を救う如来の大悲も又真実そのものであったのである。それがためにこの両者は「故」(ゆえ)の一字で結ばれるのである。

当時の仏教は単なる観念的学問に終始したり、難しい苦行に縛られる、といった一般民衆と遊離したものであったが、上人は最もきびしい自己反省から、真の人間の姿を発見し、更にその赤裸々な人間が、現実に救われる道を発見されたのである。しかもそのことが本当の仏教を大衆へ生かすことになったのであり、最も偉大なる大宗教改革ともなったのである。自分の発見は万人の発見となり、自分の救済は万人の救済となったのである。上人が善導大師の書によってこの道を発見されたのは承安五年(一一七五)の春、御年四十三才の時であった。これが浄土宗開宗の紀元である。

偉大に、最も偉大に、この道を発見されたのである。

大地はなびく

念仏の教えに絶対救済の道を発見された上人は、夢の中でも善導大師とお会いされ、ますます浄土宗開宗の決意をかためられたのであった。

かくて比叡の山を下りて、京都東山吉水の池に草庵をむすばれたのである。これが今の知恩院の地である。上人は八十才で亡くなる迄の四十年間を、殆どこの地で過ごしたのであった。その四十年間には流罪にあわれたこともあったし、一時的には二三住居をかえられたこともあったが、吉水の地に住された年月が一番長いのである。御臨終もこの地であった。

さて、山を下りてからの上人は、ひたすら念仏の教えを弘めるための伝道に熱情をかたむけられた。

上人のこの新しい生き生きとした教えには、人々雲集したのは勿論である。真剣に念仏の教えを乞う求道者もあれば、自身の安心を喜ぶ罪人もあり、天皇・公卿の帰投から、武士・盗賊・遊女に至るまで、あらゆる階層

の人達が参集している。

正に大地そのものが、すさまじい勢いでなびきよせたかとさえ思われる上人への雲集であつた。左にそれらの中から代表的な幾人かを記しておく。

高倉天皇・後白河法皇・後鳥羽天皇の三帝

は上人を帰依の余り、上人から戒を受けられたといわれる。鳥羽帝の皇女上西門院、後鳥羽院の中宮宜秋門院、及び順徳院の母修明門院等も同様である。

公卿では関白九条兼実・左大臣経宗・左大臣兼雅・右京權大夫隆信・民部卿範光・内大

臣実宗・兵部卿基親、等々皆熱心な上人の帰依者となり、中でも兼実公は上人と最も深い因縁を結ばれている。

武士では蓮生房となつて有名な熊谷次郎直実・甘糟太郎綱忠・津戸三郎為守・大湖太郎実秀・宇都宮弥三郎頼綱、その他数多くの猛者達が伝えられている。

この外一般では盜賊の天野四郎、変態者の阿波の介、播磨高砂浦の漁夫、同室の遊女、等変つた人達が上人の帰依者となっている。

僧侶では勿論多く、とても列記することはできない。上人七十二才の時に、主な弟子八十余人の名を連署したものがあつたから、とにかく相當な数が想像される。かつての師僧の寂空もやがては弟子となられたのであつた。

この外他宗の高僧の帰依も多かつた。

浄土宗の二祖を次いだ鎮西上人や、真宗を興した親鸞聖人、東大寺の重源上人等は弟子の中でも有名である。

(童) (心) (仏) (心)

お涙頂戴

良子さんの家に、新しいおかあさんが来ることになりました。

「よかったわ。これでのびのびと勉強ができるわ。」

洗濯物や台所仕事から開放され、ほころびた洋服も着ないですむ良子さんは大喜びです。

しかし、隣のおばさんはいいました。

「かわいそうねえ。おかあさんが来るなんて。つらいでしょうけれどがまんするのよ」

前の家のおばさんもいいました。

「本当にね。こんなかわいい良子さんの所にね——。さびしい時には、おばさんの家にいらっしゃいね。」

良子さんの喜びの風船は、だんだんとしぼんでいって、悲しみの水槽から雫がホロホロとこぼれました。

これを見たおばさんたちは、わが意を得たりとばかりに、うなずいて鼻をすすりました。

新しい母を喜んで迎える良子さんの心を、ふみにじるのは誰でしょう。

悲劇のヒロインをでっちあげて満足する第三者でした。

(桐)

時子の行き先

編 集 部

東京都といっても、川一つ隔てて向側は神奈川県なので、辺鄙なところに違いない。バス路線がここまで延びて以来、自動車の量が目立って増し、商店の飾つけも派手になっ

て、おかみさんの身なりまで、こざっぱりしてきたのも妙であ。た。しかし少し裏に入れば麦畑が点々とあり、昔ながらの農家らしい茅葺が眺められて多分に閑静なところを残している。

夜が明けた時分には朝食をすませているが、日さえ暮れば夕飯となり、ラジオすら余り聴かないで床にもぐり込んでしまう。こうした暮らし方が一部の商店街を除いて、土地に住む人々の毎日であった。だから昼間の雑踏はどこえやら、夜になると急に物音一つ聞

えない昔ながらの淋しい所にかえってしま。う。ある日、例の如く風呂から出揃うのを待っていて夕食が始った。今年の冬が暖かったせいで、「夏が早く来るかも知れないネ」と年寄りが独り言をいう位に気温の高い日であった。「お前たちの宿題は終わったのかヨ」と、ありふれた注意をする位で話題もなく、一日を終りかかっていた。私は一合の晩酌もそこそこに、さてご飯と茶碗を手にした時であった。私たち——年寄りも子供たちも一せいに本堂の方にふり返った。今たしかに本堂の戸が開いたからであった。

うちの本堂の、表面の戸は、子供なら力一ぱいに押さないと開かない位に重かった。開閉にはガラガラッと音がして庫裡にいても必ず聞える。今そのガラガラッという音がしたのであって、これを何か外の音と間違える気遣いはなかった。

ハテと思つて、私はすぐ立ち本堂に行つてみた。子供たちもついてきた。しかし本堂は何んの変りもなく、もちろん戸も開いていなかった。

茶の間にもどつて、子供たちは議論していた。「足音を聞きのがしたにしても、犬の吠えないのがおかしい」と、一人が犬小屋まで様子をみに行った。「あれは開ける音であつて、閉めた音がしなかった」というものもいた。「今日などは暑い位の陽気だから、耳鳴りのせいだろう」と年寄りがいえば、「全部が耳鳴りかヨ」と末っ子は不満をならした。

私は「サア学校の用意はいいのか」と話題を変えたくて、ラジオのスイッチを入れた。やがて子供たちは床に入つたがそれから間もなく、二人連れの訪客があつた。

「息を引きとつたのは、午頃だと医者はいうのですが、近所の者が騒ぎ出したのが二時頃なので、おときさんも気の毒に二時間以上も

閉にはガラガラッと音がして庫裡にいても必ず聞える。今そのガラガラッという音がしたのであって、これを何か外の音と間違える気遣いはなかった。

ハテと思つて、私はすぐ立ち本堂に行つてみた。子供たちもついてきた。しかし本堂は何んの変りもなく、もちろん戸も開いていなかった。

独りでほっぽり出されていたわけですよ」

と二人の使者は口々にいうのであった。

おときさん——稲村時子——は誰一人見取るものもないままに息を引きとり、そのまま独りでねかされていたことになる。彼女の終焉に涙一つ流してくれる者のなかったのは哀れであった。

稲村の家は、この土地の草分けというより何代か続いた農家であった。農家といっても水呑み百姓の類に過ぎなかったが、震災後に、この土地にまで住宅が建てられ、何反かの畑が宅地になり、それがまた飛ぶように売れたとかで、その時分が稲村家の全盛時代であった、当主の増蔵が寺の世話人になり、随分尽してくれたのも、その頃のことであった。

増蔵には幸雄と健蔵という二人の子があり、これがまた自慢の種で、事実よくできた子供達であった。長男の幸雄が少年航空兵を志願した。親せき知友等の沢山の人々に見送られ、童顔を紅潮させて門出をしたが、その時の立派さは今でも忘れないう。しかしこの出垣を分けて家にと

征の日から稲村家の上に暗雲が舞い下りてきたことを誰も気づかなかった。

戦争は苛烈を極め、敗色が濃くなった。昭和十九年秋、幸雄戦死の公報がとどいた。しかし増蔵夫婦は、この公報を信用しなかった。やがて終戦となり、一年たち二年たった。近所の息子たちは、降ったかわいたかのように帰ってきた。中には真夜中に帰ってきた者もいた。帰らないまでも初めて音信があったと喜ぶ家もあった。増蔵夫婦は、近所に帰還者がある度にわがことのように喜んだ。

もともと酒好きの増蔵は、酒というより酒らしいカストリを探すのに夢中であった。酒精を水でわって飲むこともあった。恐らくこんな生活のためであったろう、増蔵は決して帰ることない幸雄を待ちわびながら、昭和二十三年春に脳溢血で逝ってしまった。

後に残った妻の時子と次男の健蔵は、どんな仕事でも働いた。健蔵は働き者であった上に、気質のやさしい息子であった。

この頃から、この辺一帯は目に見えて発展して行った。バスが通り始めると、今までになかった立派な菓子屋ができたり、洋品店が

店開きをした。表面だけを改装した急造りの喫茶店ができ、中を薄暗くして、お客があるのかないのか知らないが、美しさから程遠い女給がいて、店さきを掃除したりしていた。久し振りに訪ねてきた者なら誰でも驚く繁華さを示していた。

世間が落ちついてくると、資力の乏しい者は仕事が難しくなる。どの商売にしても、やせ腕一本の資本では、勝負になるわけがなかったが、健蔵は若い身体一つをもとにしてよく働いた。しかし結局は、健蔵がいかに働き者であったにせよ、定職のない力仕事を主とした日傭から脱けきらなかった。時子や健蔵にしてみれば、売りたいくても売れる土地をすっかりなくした後であったし、周囲の土地の急速な発展ぶりに押しまくられて、どうにもならなかったのも止むを得ないことであった。

そこで健蔵はいろいろと考えて、自動車の運転手を志し、ある会社に助手として勤め始めた。ある日のこと、健蔵の乗った車は川原に降りて、その石を積むことになった。砂利というには少し大きすぎる拳位の石であった。車にはうず高く積まれたので、もう最後

信 仰 実 話

話 実 仰 信

の一すくいだと健蔵が前にかがんだ途端に、車から石が落ちてきて、運悪く彼の後頭部に当たってしまった。

病院にかつぎ込まれてから間もなく意識を回復し、かなりの痛みがあったが、翌日には退院し、家で静養することになった。初めの内は別に意味もなく、母親の時子が附添って

病院に通った。しばらくして時子は、これは少しおかしいと気がついた。健蔵が相変らず独り歩きを不安がるので時子は附添を止められなかった。また頭の痛みも、外傷によるものでなく何か頭の中の方で痛んでいる風であった。

その内に時子は、健蔵が発作を起すことに気がついた。この発作というのは、一時的に意識が薄らぐような具合であった。しかも発作の度数と程度が日増しに多く激しくなるように思われて仕方なかった。

時子は日傭いに精を出して稼ぎ始めた。こうなると幸いに、あちらで二日、こちらで三日と気持よく時子に働かせてくれる家があった。時子は下手な世辞や世間話が嫌いであっ

たし、自分の愚痴と他人の悪口をいわぬ性分であったので、案外方々で時子が喜ばれ、用が済めばまた今度も是非にと、結構毎日のように働く口が見付かった。時子は若い頃には野良仕事の経験があったので、どんな仕事もやってのけたし、健蔵の看病という切羽つまつた事情のために、一層精を出して働けたわけである。

健蔵の病勢は一進一退で少しも回復しなかった。しかし白痴というわけではなく、一日の内では何回か呆然りするだけで、留守居番のことなら十分間に合った。時子にしてみれば大人になっても子供は子供に相違ないわけで、自分が外で働くのを少しも苦にしなかった。健蔵が元気でいてさえくれば、いつかは脳も治るであろうし、大難が小難ですんだというもので、時子の心の張りには影きょうしなかった。

ところが去年の今頃のこと、その日もやはり汗ばむ位に暖かった。時子は三時のお茶を喫しながら休んでいると、近所の知らせで急な迎えを受けた。時子は不吉な予感で息が止まりそうになりながら夢中で帰った。すると

家の周りに大勢の人が集っていて、時子は人び込んでみると、無惨、健蔵はすでに冷たくなって横たわっていた。

目撃者の話によると、健蔵はバスが停留所に停るのを見とどけてから道を横断したのであったが、バスの側をすり抜けてきた三輪車にはねとばされた。余程強く頭を打ったらしく、僅か耳の後に裂傷があるだけで、他に外傷が見当たらないのに、即死であった。

「あれだけ毎日、独り歩きをしてはいけないヨ、といいきかせていたものを」と嘆く時子の姿に、近所の人は目をそむけざるを得なかった。三輪車の持ち主の会社では、健蔵の葬儀一切の世話をした。しかしいくら親切に丁寧に世話をしてくれたからといっても、時子の嘆きと悔みを軽くできるものではなかった。

それから一年間、時子がどんな暮しをしてきたか、私はよく判らないが、日傭いしながら生計をたてていたことには間違いない。以前は無口で働くので評判がよかったが、その後は無口を通り越して返事すらろくにしなくなり、仕事の合間にぼんやり手を休めていることが多かったそうである。その内

に段々と陰気な時子をたのむ者が少なくなり、時子自身がたまに頼まれてもだまって半位日を休んでしまい、当てにならぬ日傭になつてしまつた

出入りの酒屋から、「近頃お時さんが焼酎を飲む」とか、「心臓を悪くした」とか、そのために「むくんでいる」とかの噂を聞いたことがあつた。しかしその外には時子の噂をする者もなく、自然と世間から隔離され、人の目から消えて行つたようであつた。

この一年間、とり遺された時子は、光明のない悲しみとうれいにとざされていたに相違ない。焼酎をいくら飲んでも悩みは悩みを生む外はなかつたであらう。こんな時子であることを、実は私は知らなかつた。

信 仰 実 話

陋屋にたつた一人で息を引きとつた時子は、夫や息子たちの許にゆくのが、唯一の希いであつたと思う。だから近所の人が時子の死を報らせに寺にきた時には、一步先きに御本尊の側近く蓮台上にきていたのだと、私は独り信じている。

日本靈異記より

嬰兒驚にさらわれ

他国で父にめぐり会つた話

それは皇極天皇の御代の或る春の事でした。但馬の国七美郡と言う處、即ち現在の兵庫縣美方郡の山里に住むある人家の中庭で、赤坊が腹這つて遊んでいました處、突然一匹の驚が現われ赤坊を連れ去つてしまいました

そこで赤坊の両親は非常に嘆き悲しんで方々さがし歩きましたが、どうしても見付け出す事が出来ませんでした。悲しみの夫婦はもう仕方無く死んだものと諦めて、赤坊の葬式もいとなみました。それから八年後の孝徳天皇の御代のある秋の事赤坊を驚にさらわれた父親は、或る用事で丹後の国加佐郡即ち現在の京都府の加佐郡に出掛けそこで一泊しました。その宿の女の子が水を汲みに井戸迄出掛けると言うので彼も足を洗うため一緒について行きますと、その井戸にやはり水汲みに来ていた村の女の子達が邪魔してその子に汲ませてや

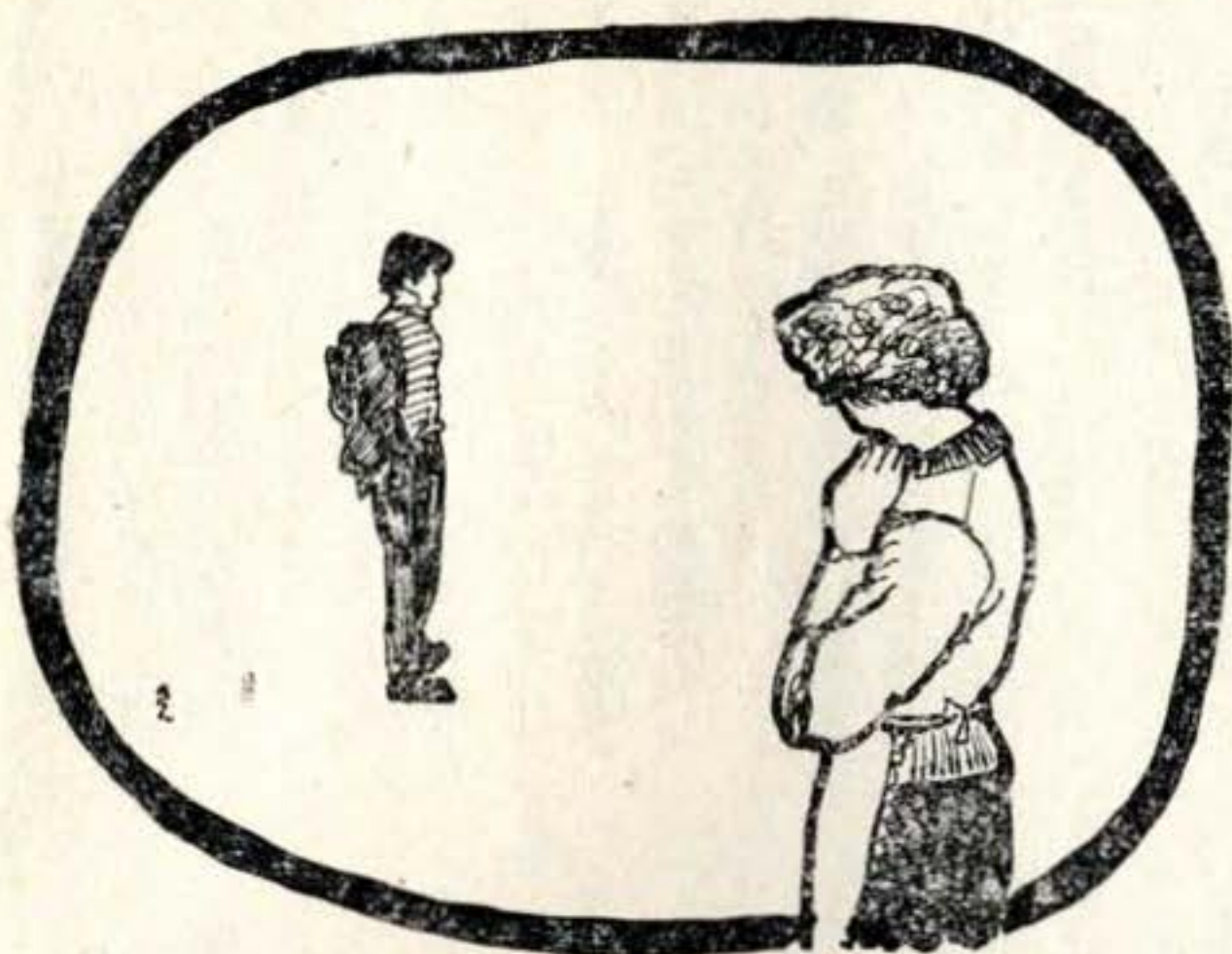
りません。その上口々に、「驚の食い残しやい」と罵り乍らなぐりいじめるので遂にその子は泣きながら家に戻りました。宿の主人は何故そんなに泣くのかと聞きますので一緒に行った旅人は今見て来た様子をつぶさに語り、何故驚の食い残しだ等といじめるのか訳を主人に聞きました。すると主人が答えて言うに「これこれしかじかの時私は鳩を捕りに山に行ったら、突然驚が赤坊をくわえて飛んで来て果の中へ落し雛達の餌として与えようとしたら赤坊が泣きわめいたので、驚の雛達は驚いて遂につつかなかつたのです。そこで私は赤坊を果から救出して育てたのがこの女の子です」と話しました。そこで旅人は自分が子供をさらわれた年月日と今の話を照し合せて、明らかに我が子だと知り自分が子供を八年前驚にさらわれた話を事細にしましたので、宿の主人も氣持よく承知してその子を返してくれました。偶然の事とはいいいながらこれも天の恵みでしょう、親子の縁は誠に深いと言う不思議なお話です。

(Y S)

仏壇物語

石川 忠 正

え・加藤 金一



(一)

限りなき法のかずく
演べたまう御声は一つ
この御声あまねく至り
人はうつわに随い悟る

——讀仏の歌より——

まあ、一杯いこう。正直のところ、新米のあんたがどう補導してゆくか心配だった。おそらく、忽ちお手上げだろうと思っていたよ。今度の郡保護司大会には、ケースとしてひとつ、提出して貰いたいね。なに？ あ、俺の愛持か、あれは単純な不良学生だったが、完全に立直ったよ。月日はかかったがね。親子二人きりの家庭で、原因の一つは母親が甘やかし過ぎたんだ。愛情過多症さ。もっとも生活に困らない家だし、一人息子だから無理もないと思う。しかし、愛は方法を生むというが、盲愛は又万愚を作る、だな。母性愛にはだ、子供の精神の成長過程を理解するだけの知性が伴わないとうまくない。つまり精神年令に相応した愛の表現だな。ところが須川親子の場合は、母親の方が逆上しちゃって、ただもうおろおろと、息子にまつわりついて泣きくどく一方で、処置なしなんだ。或る日俺が行くと、すっかり思い詰めた顔をして、

「あたしはもうどうしてよいやら、涙も出なくなりました。いっそ、あの子に毒でも飲ませて、あたしは首でもくくろうかと。このままでは、亡くなっ

た主人にも、世間さまにも申訳がなくて——。」そう云って、青くな
ってる。聞けば、その日、死んだ親父が大事にしていた、いわば形見
の懷中時計、そりやア昔物だから型は古いし、若いもんの実用にな
る代物ではなからうが金側の外国製だったそうだ、それを、止める
母親を蹴飛ばして、持出したと云うんだ。だが俺は、彼が家の物こ
そずい分運び出したが、まだ他人の物へは一度も手をかけたことが
ないということに、脈が充分あると考えて、希望を捨てたくなかつ
た。と云って、もはや理性で対処することの出来ない母親だし、ど
んな方策をとったらよいか、流石の俺も万策尽きた思いだった、
そのとき、ふと目を上げると、めそめそ泣いている母親の背後に、
その家の仏壇が見えたんだ。花も水もない寒々とした仏壇がね。

「あんた仏さまを拝むことがあるのかね」ときくと「いいえ。主人
になんだその態たらくはと、叱られるような気がして、仏壇に向う
のが恐ろしくて、殆んど扉も開けたことがないのでございます」と
云って又泣くんだ。そこで俺は云ってやった。「あんたは、今、死
にたいと云ったね。では死になさい。ただし首をくくれというので
はない。死んだつもりになって、亡くなった御亭主と二人でこの仏
壇の中で活すのです。こう云っただけでは解らないでしょう。いい
ですか、今日限り息子さんには、小言や愚痴は勿論、用事以外には
余計な口をきいてはいけません。そして、仏壇をいつもきれいにし
て、お花や水をいつも新しくして、朝夕、心静かに、只手を合わせ
て念仏を唱えるのです。息子さんがどんなに遅く帰ろうとも、これ
から又家の物を持出そうとも、不良仲間を家へ引入れても、決して

責めなさんな。じっと我慢をするのです。それを一年間続けなさい。
根気のいる仕事ですが死んだつもりになれば、やれる筈です。
一年間、亡くなった御主人と一緒に、仏壇をお二人の部屋のつもり
で過すのです。私に騙されたと思って、やってこらんなさい。」とね。
そのおかげであつたかどうかは、こりや神様でなくちやア解らない
が、とにかく、結果として、今はすっかり孝行息子になつてゐる。
きどき母親が俺ンとこへ来てね、今迄の苦勞がまるで嘘のような氣
がするって、泣笑いしてゆくんだ。此の間、うちのかみさんが、ど
つかの映画館に母子で入って行くのを見たそうだが、ま、そんな話
をきくのが、俺達保護司の保護司名利知かもれんな。仏壇の話が出
たから云うが、その家の幸、不幸は、その仏壇を見ると、大体解
るような氣がするよ。うちの檀家はかれこれ二百六十軒ばかりある
が、何年前に上げたものやら、すっかり色の褪せた造花もそのまま
にして、位牌ともども埃を被っているような家、そんな家に限って
不思議に死人が出るんだ。あんたも今後氣を付けてみるといい、な
にかゴタゴタ騒ぎが起る位の家なら、きつと云つてもよい位、仏
壇が汚なくなつてゐるか、花も水も、お仏器もあげられたあとがない
から。全く妙なもんだぜ。商店にしてもそうなんだ。外から見ても
くら景氣のよさそうな店でもだ、仏壇をなげやりにしてゐるようだつ
たら、まんず経営が思わしくないか、ひどければつぶれかかつて
と睨んで間違いない。これは畢竟、人間、菩提心を忘れとるのは、
平常心を失つとるということなんだらうなア。なんだ、あんた
少しもやってないじゃないか。俺一人で氣焔をあげてもつまらな

い、さ、ぐっとあけてぐっと。

(二)

まあ、全然お手直しなしで、これでよろしいのですか。あら、そのようにお褒め下さっては、あたし、根が単純ですから本気にしますことよ。でも、お花をこうして観て居りますと、芯から心が洗われるようで、気持のよいものでございます。それに下手でも自分で一所懸命活けたお花は格別——。お師匠さまによく出きた、などと云われますと殊更、なんといいましたらよろしいか、心がすうっとお花を通して行って、それが又、お花の心と一緒に自分の胸に、いえ、身体全体に戻ってきて、それはそれは豊かな気持になるのでございます。娘の時分にお稽古に参りましても、こんな気持はついぞ味わったことがございません。ただもう、お友達とおしゃべりに夢中で、おほほほ——。結婚しましてからも余り活けたことがないのでございますよ。ときどき婦人雑誌のグラビアなどに、生花のお写真が載りますのを見て、思い出したように活けたりはしましたが、亡くなった主人が、全くの無頓着で、見るだけは見てくれたようでしたが、いいとも悪いとも、それこそ、あってもなくてもどうちも同じような顔をして、本当に張合いのない人でした。そうそう、たった一度だけ批評をしたことがございました。今、思い出しても可笑しうございます。葉牡丹を活けましたら——これうまそうだな——喰えるんだらう——って、あとにもさきにも、お花のことで口をきいたのは、そのときだけでございました。そんな具合で、

その後はいつからということもなく、お花から遠ざかっていたのでございました。それが、専興寺の和尚さまに、お仏壇に毎日新しいお花をと、お教え載いたのがキッカケで、五十過ぎた今日、漸くお花の功德が解りかけたような訳でございます。和尚さまはあたしの恩人、いいえ、あたしと子供と二人の生命の恩人でございます。昨年の今頃、あたしは本当に死んで了いたいと、何度決心したかしれないのでございます。恥を申さねばお分りならないと存じますが、只今高校へ通って居りますあの子が、主人が亡くなってからと云うものは、あたしの言うことはちっとも聞入れてはくれなくなりますし、反抗期と申すのでしうか、悪い友達を作って金使いが荒くなりまして、学校の先生に注意して頂たくようお願いしますと、それが又気に入らないと怒りまして、なにかと乱暴するのでございます。そのこの襖もこちらの障子も踏みつぶす有様、親戚の誰彼を頼んで意見しても、ますます不貞腐れるばかり、思い切って小遣いを切りつめましたら、家のものを手当り次第に持出して、どこでどうしてお金に換えるものやら、考えるだけでも恐ろしいことでございました。一度なぞ、主人の形見の時計を、それはロンドンの支店詰の折に買いました主人自慢の品で、東京の銀行に戻ってから毎日肌身離さず使っていたものでした。それを、たたき売ってやる、こんなものを今どき吊るすバカの顔がみたい、といって持出そうとするので、あたしは、子供に取纏って必死に止めました、泣きながら、——そうしますと、あの子ったら、ぞっとするような冷たい目であたしを見下しまして、ふん、ママ、ママは金色夜叉の真似がしてみ

たいのか、そうだろ、ならこうしてやる、といって、あたしをいきなり蹴飛ばしたのでございます。肩口を——。その頃にはすでに警察の御厄介になることも二度三度、和尚さまも保護司として何回もうちへ見えられました。親を足蹴にかけて出てゆく子供をみて、これがこの世の終りだと思ひまして、あたしは死ぬ覚悟を決めたのでございます。もちろん、子供も殺してでございます。でもそこが女でございますねえ、和尚さまのお顔をみますと、ふっとはりつめた心がゆるみまして、覚悟のことを口走ったものでございます。すると和尚さまは、それはそれは厳しい目差して、あたしをお睨みになり「死んだつもりで仏さまを拝むのです」と申されました。仏さまときいて、あたしもなにか身体はどこかを、びしいっ、と鞭で打たれたような気持がいたしまして、和尚さまのお言葉にお縋りする気になったのでございました。めったに開けたことのないお仏壇を開きまして、それから朝な夕な、一心におつとめをいたしました。はじめの中は、子供のことで、お念仏も上の空でしたが、一ト月経ち二タ月経ち、三月と過ぎるにつれて、お仏壇の前に座った自分が、いえ、本当の自分というものがこの身体を離れ、すっ、とお仏壇の中に入って、主人と一緒に並んでいるようなところもちになりました。まして、お仏壇の前にお座布団を敷いてお称名している自分が、別な、小っぱけなもう一人の自分に見えるのでございます。そうなりますと、あれ程口惜しく悲しく情なかつた子供の立居振舞も、まるで嘘のように静かな心で、おおらかな目で、丁度映画を観て居りますと同じように、子供のこころの動きまで、客観的にと申すのでし

ようか、自分の感情に捉われずによく見えるような気がして参ったのでございました。そう見えるようになりますと、子供はきつと立直るといふ信念が、心の底にどっしり据わりまして、もう子供がど



のように乱暴な仕草をしましょうとも、少しも心が乱れることはなかったのでございました——。今は本当に一日一日が倅せで、有難いことでございます。先日など、あの子ったら、一緒に映画へ行こう「いつも仏さまばかり拝んでると、お婆さん臭くなっていやだ」と申しまして、はい。映画館へ入りましても、嬉しくて嬉しくて、涙もなくぼろぼろ涙がこぼれまして、映画の画面がちっとも見えないのでございます。おほほほ、——ご免あそばせ、不躰な涙などお見せしまして、——まあ、思わず内輪のお恥かしい話を、過ぎたことまであらいいざらい、さぞ興褪めてございましたでしょうに、どうぞお笑い下さいませ。え？ 花の極意も、過去現在未来を表現するにある、はい、過去を芯にしっかりと据えてこそ、未来も伸びやかに美しく、現在も豊かに落着いて存在する、はい。——そう申されますと、鈍なあたしにもなにか解るような気がいたします。有難うございます。

(三)

おい、この映画ミーチャンハーチャン向きのやくざ映画じゃねえか、つまらねえ、止そうや。M公園によ、C高校の野外画展があるんだ、行こう。タクシー？ 歩いて行こう。ゆっくり歩いても三十分はかからねえだろ。あ？ 変った？ ひやかすのか、止せよ。おだてたって何もおごらねえぜ。あのな、親友のお前にも心配かけちゃってよ、いつか機会があったら謝まろうと思ってたんだ。ただ照れ臭いから黙ってたんだ。オレだってよ、ぐれたくてぐれたんじゃ

ねえんだ。おふくろがさ、あんまりうるさく干渉するんだ、おやじが死んでからってものはよ。オレよりほかに構いたくても構う人間が居なくなつたからなんだろが、なにもオレ、おふくろの亭主じゃねえんだから、おやじの分迄おふくろの相手をする必要はねえだろ。それをおふくろったら、することなすこと、それこそ一分だってオレをそつとしてくんねえんだも、大概やんなっちゃうよ、息がつまりそうなんだ。苟々してるから返事も億劫だし、めしもなんだかうまくねえしさ、そうするといよいよおふくろがしつっこく心配するしさ、たまにやわあつ！ と叫びたくなるんだ、衝動的にな。まさか気狂いの真似も出きねえから、手っ取早いとこ外へ逃げて出る、毎日のことだから自然盛り場の方へ多く足が向く、金は使う、遊び連中としょっ中顔を合わせるからだんだん深間へ入って行く、で、おふくろが半気狂いみたいになって、家の中で泣き喚くようになる、学校へ御注進とゆくだろ、親戚の伯父の処へも御意見番を頼むとくる、ところが、その大人共ときたらどいつもこいつも木偶の坊でよ、オレを芯から不良扱いにしゃがんだものな、神妙な面してさ、くそ面白くもねえ。なにもオレ、本気でカブレてた訳じゃねえんだもの、不良仲間と一緒に遊んでても、なんてこいつら頭の悪い下らねえ者ばかり揃ってるもんだと、腹ン中で可笑しくって仕様がない位のもんだったさ。そんな下らねえ奴らとオレを一緒に考えてやがるかと思うと、先生だも、伯父だも、姿を見ただけで癪にさわってよ、逆にもっと悪いことしてさ、ざまア見ろといいたくなつてよ、どう自分を押えても素直に話などききたくねえさ。すると

今度はおふくろのやつ、一銭も小遣いくれねえんだ、金が無けりア遊びに出られねえと考えたんだろ、まるでオレを三つ子かなんかのよう^{よう}に思ってたんだ。誰もオレの本当の気持を理解してくんねえから、オレは本気でヤケを起したんだ、カーッとした、家に火をつけちゃおうとしたこともあるんだぜ。お前笑ってるけどよ、その頃のオレ、周りの人間がみんな仇敵^{かたき}に見えたもんだぜ。ところがよ、どんな拍子からか知らねえが、おふくろがさ、オレんところをパツタリ構わなくなったんだ。いや、構わねえたってめしは喰わせたさ、変なことをいうなよ、ただ、その、オレのやることにまるつきり干渉しなくなったのさ。うん、オレ暫らくの間、ぽかんとしちゃったよ。そしてさ、おふくろったらひどく思いつめたような顔してさ、毎日朝晩仏壇拜んでんだな。オレも最初はよ、ふん、こんどは神がかりでオレを真人間にしようとかかってんだなって、ひねくれてみてたさ。それが何ヶ月も続けてやってんだぜ。それよりもなによりも、誰も構わなくなったんで、オレすっかりのんびりしちゃってなア、不良仲間と下らねえ遊びすんのもバカらしくなったし、第一、気がついてみりゃ、えらく勉強も遅れてるしさ、ぼつぼつ部屋にとじこもって勉強しだしたさ。でもよう、急に真面目になったと思われんのも業腹だから、今迄通りなるたけ外へ出て、それでお前ンちなんかもすい分行ったって訳さ。お前ン家のおふくろがよ、オレが行くと、いやな不良が来た、ってな顔したぜ、露骨によ。今はしなくなっただけ。オレお前が悪い顔しないで相手になってくれたから、別に腹も立たなかったけどよ。どこのおふくろもさ、自分の子

新規会員紹介

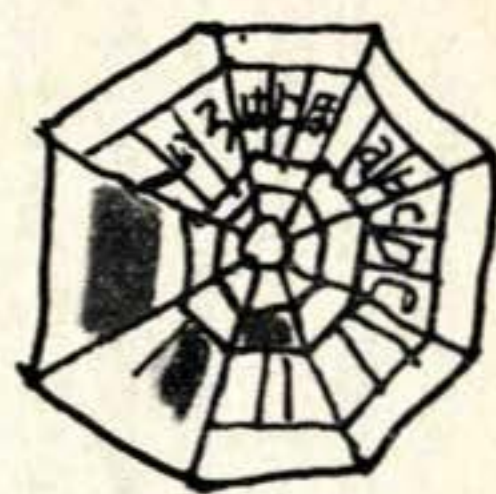
長野	淵之坊	東京	専称院
東京	龍原寺	"	阿部玲子
"	橋本俊栄	長野	山本サチ
愛知	浄名寺	佐賀	潮音寺
"	聖臨院	千葉	光照寺
神奈川	福泉寺	山形	金城寺

供っていうと目の色を変えるんだな。そしてなにかってえとすぐ感情的になる。おやじってのはその点存外冷静によ、子供を客観的に見る事が出きんじゃねえかな。なににお？ ふん、そんな雷おやじだのなんだのと、居るからこそとにかく悪口だって云えるんだろ。オレはな、たまにゃぶん撲られたっていいから、おやじが生きてたらなアって、年とるたんびに思うなア。おふくろだって、おやじが居ねえから余計にオレを構うのも、なにかこう頼りになる人間がほしいからなんだな。それにきつと淋しいんだな。オレ、仏壇の前で、毎日、小っちゃくなつて、おやじの写真に手を合わせてるおふくろを見ると、なんていったって、可哀想だと思うよ、やっぱり。オレでさえ淋しいんだものな——。おい、見ろ、C高校のやつ、会場の入口に、しゃれたアーチを作ったぜ。両側の柱を、バレリーナをデフォルメした裸婦像とは、ちょっと気がきいてらア、金もかかったろうな、さ、入ろう。

(おわり)

眞理の花たば

——若き女性への仏教入門(三)——



佐藤良智

正しきもの

(その一)

若人は純潔である。純潔はどこに芽ぐむものであろうか。それは、正しさのなかにあるのだ。正しいもののえの憧れが純潔なのだ。そして、正しさの外にどこに純潔があるう。

正しきものは、また、道に通ずる。若人の純潔は道に通ずるのだ。

世尊は、八つの正しき道を説き給うた。
若き人の瞳は澄んでいる。澄んだひとみ。神祕の窓だ。

この瞳こそ、正しき眼だ。このひとみこそ、正しくものを見るのだ。

正しく見る——。それは道の初めである。天地を貫く大道は、正しくみることに始まる。本当のことが見られなければならぬ。

世尊は、正しい道をとかれたという。この道は、しかし、どこえ通じているのか。青く澄んだ大空のもとに、大樹の立ちならんだ並木道が一本。続いている。続いている。この道はどこえゆく道なのか。

八本の道は八本であって、一本の大道なのだ。この道のたどりつくところは——、

ね、は、ん、と、名づけられた永遠のみに、なのだ。紅ないもえる理想のくになのだ。真理の花たばの、捧げられべき聖なるくにだ。天のはて、地のはて、人類の永遠のころのはてにさんとして輝くみに、た。

人類がとわに求め、永遠にあこがれ、永遠に実在する淨きみに、だ。

しかし、世尊は、初めから、このみにを明らかにされはしなかった。

神祕のべールにつつまれたままであった。大乘のみ教えをお説きになるまでは、ただ、行きついた者のみが知り得たみにであった。世尊は初めから積極的に説かれはしなかった。それでいいのだ。この淨きみに、は、い、の、ち、の、みにである。い、の、ち、は、い、の、ち、のままに御自身をあらわし給う。世尊のみ教えを通じておん自らをあらわし給う。

このみにに至る道が八正道なのだ。しかし、この道を歩むことは、それほどたやすいことではない。

いな、それよりも、この道をたづねあてることがまづ大切なことだ。

本当のことをみることが大切である。

世尊が説き示された、本当のこととはなんであるか。

澄んだ瞳が、人生という、おごそかなものに、むけられ

るときに、自ら身を正さずにはいられない。

世尊のあたたかいが、鋭い眼光が人生にむけられたとき、人間の苦しさがえぐりだされた。生れること、老ゆること、病むこと、死すること、四苦という。あまりにも端的だ。しかし、逃れることができない。限界状況だ。若人にとってはこれらのことは、関心事のほかのことだろう。しかし、真面目に人生に立ち向うとき、これらに目をふさいではいられない。

現に若くして、自らの命さえ絶つひとがある。この四苦にかかわっていることだ。若人よ。自らの命を絶ちなどしてはならない。人生は楽しいことばかりではない。寂しい位だ。世尊は、世間は苦しいと申された。寂しいと言ってもよいのではないか。当歳にして母を失われた世尊が、寂しさを深く体験されたであろうことは充分に察しられる。あなただけが苦しいのではない。寂しいのではない。皆、寂しいのだ。よりそって行こう。よりそううちに力が湧いてこよう。しかし、この寂しさをごまかしてはならない。寂しさにジット目をすえるのです。寂しさを味うものこそ人生を味うことができる。そうも言えるのではないか。四苦の対象にジット目をむけること。それは人生を真実に生きるものの第一歩と言えよう。念死という恐ろしい

ことばさえある。死を念ずる。思いのはてだ。ごまかしてはならない。死との対決である。そこにこそ真実の生ける人生が開けてくるのである。死をつつみ、生をつつんで、その上に生き抜くことこそまことの人生なのだ。

四苦の外に更に四苦を加えたものが八苦である。

愛するものと別れる苦しみ！

別れるということの寂しさ。人は人をなつかしむ。人というものが本質的に一人ではなりたたないものであることは、人という文字にあらわれていることをたれでもが知っている。一時の別れもさびしい。ましてや永遠の別れとなれば苦しみである。とめどなき涙をもっても覆いきれないかなしみである。しかし、人は目を覆ってはならない。正見の視野から離してはいけない。真実があらわれないからである。ひたすらにありのままの真実をみきわめなければならぬ。

憎きもの、怨みあるものに会わなければならない苦しみ。

怨憎二つながら人生になきもがなのものである。うらみ、とは、にくみ、とは、なんとところよからぬことばであろう。うらみある人と会う。憎き人と会う。現実が夢のように美しいものではない。時に会うべきものには会わねばならない。苦しくとも会わなければならない。事実は

否み得ない。

人類が始まって以来、地上は、うらみ、にくしみによってどんなにかけがれにこったであろう。現実をありのままに見れば、憎しみと怨みとにわきかえっている。積みかさねられ、層をなしている。怨みには怨みをもってむくいてはならないと聖者がいましめ、さけぶとも、けがれた人のところはどのようなしようもない位だ。それでも、正しく見よ、ありのままにみよと世尊はのべ給う。

求めて得ざる苦しき！

世尊は、時とところとを問わず、存在する事実を、あまりにもずばりと申される。ぎくりとすることばだ。

求めてやまないのが人のところだ。しかも、求めるままに得ないのが人のつねである。ここに苦しみがある。

求める——欲望によって人は存在すると言えよう。世尊も亦、欲望を迷いの根本とし給うた。すべての欲望が迷いは言えない。しかし、純化しない欲望は、迷いだ。純化した欲望はもう欲望とも言えないであろう。それゆえにひとは、いつも欲望と共に生きている。母のふところから生れたときから求めごころはつきまといっている。しかし、地上に、求めるままに得られたひとがあるであろうか。求めるままには得られない故に、求めるごころを打捨てようとし

ても、これまた、求めるところとなつてしかも、得られな
い。苦しみがく人のすがたはあわれである。自らのため
に、ひとのために、よきことを求めても、思うにまかせな
い。純化された欲求にもまた古しみはある。ひとのこころ
が、がんじからめにされた思いである。

八苦の最後は、五蘊盛苦とよんでいる。人間の苦しみで
ある。前の七苦をふくめて、人間は苦しみの海にある。旺
盛な、生活力をもてばもつほど、苦しみは増すのである。
これが現実である。

夢多き、若きひとびとよ、

なやみ

なげき

苦しむ

若き日よ

しかあれど

これこそよき日なのである。

人はみな

苦しみの海にたたようただよいただよう

しかあれど

こよなき幸も

この苦しみの海こえて
はるかにこえて

かぎりなく あり、

黒き瞳かがやかし

はるかかなたをみたまえ——

(筆者・大正大学教授)

浄土宗教学院十五周年記念

講演と映画の集い

浄土宗教学院研究所の輝しき十五年の歴史を記念して、ここ
東都のセンターに大仏教集会を催すこととなつた。有識具眼の
士の一人でも多く相会して、思想混迷の世の大光明たらんこと
を念願する。

期日 四月二十日(月)午後一時—四時半

場所 東京、銀座七丁目、山葉ホール四階

講演 武田泰淳 森赫子 佐藤賢順

映画 ヘッド・ライト

参加申込みは、整理券代金百円同封にて

東京都港区芝公園十九号浄土宗務所内

浄土宗教学院

勸募日記

(四)

近代高僧のなか、行誡上人なものであろう。自坊は梅窓院。

きあと、その第一人者といえども、世に学あり、徳ある人は多けれども、両者を兼備した人は少ない。学問が信仰の裏づけをなし、信仰が学問によりて深められていく。名実共に学徳兼備の師をもとむれば、まづ阿川貫達師をあげることができる。現在、大正大学浄土学研究室主任教授として、学問研究に余念なく、また、自坊、浄土寺にあっては幼稚園を経営して、幼児よりの宗教情操教育にあたり、さらに、檀信徒の教化、宗門僧侶の教化講習にと、愈々信心のともしびをかかげて精進する姿は崇敬の至りである。

浄土寺をあとに、私たちは青山の善光寺を訪れた。住職小林観導尼。整然とした建物、掃ききよめられた境内、その中に、ひとときわ高く聳える鐘樓堂が人目をひく。一般住職では、なしえない教化の実を尼僧さん達はあげている。ありがたきこと。

さらに私たちは、名利心法寺に詣でた。相憎住職布村孝順師は不在であったが、御内室の応待をうけ、私たちの意をお汲みとりいただいた。

私たちは、東に西に足を棒にして、趣旨を説明し同志をもとめているが、何処を訪れても心から賛同し、多大の御寄謝をいただくのに一同深く感激している。それは決して私たちの力ではなくして、法につながり、宗祖の余徳を慕っての尊い浄業だからであらう。

つぎに、私たちは、矢田俊雄師をお尋ねした。自坊高德寺。現在、浄土宗議会議員の要職にあり、宗門のために御活躍。自坊も立派に復興がなり面目をあらためている。円満の中にもシレッさをもつ師に寄せる今後の期待は大きい。

この組の組長は伊東芳瑞師である。御高齢であられるが、それだけに、肝ところはよく弁まえられて居られる。持まえの円満な人格でよく組内をリードされている。自坊竜泉寺も本堂新築の企てときくが、寺門興隆の情熱は大したもの。

(A・M)

×

×

×

×

浄土の会員を一人でも多く

◇どなたでも会員になれます。

◇会費は年額六〇〇円です。

◇会員には毎月「浄土」を配布いたします。

◇この会は皆様の会ですから、その発展の為に一人でも多くの会員をつくって、正しい信仰運動をひろめましょう。

お知合の方にぜひおすすりめ下さい。

◇お申込は振替（東京八二一八七番）を御利用下さい。

東京都品川区上大崎一ノ七八二

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円
(送料 四円)

会費一力年 金六〇〇円
(送料不要)

浄土 五月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十四年四月廿五日 印刷

昭和三十四年五月一日 発行

定価 五十円

編集人 竹中 信 常

発行人 佐藤 密 雄

印刷人 神谷 秀 雄

印刷所 神谷印刷株式会社

東京都品川区上大崎一ノ七八二

発行所 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

宗派の枠をはづし、宗義の殻を除き
知解の障りを排け、素裸にした
法然像と親鸞像の前に立ち、
前者に選択を、後者に編依を見出す。
著者の胸底より湧き出でた快心の作！

東京外国語大学教授 増谷文雄 著
東京大学・大正大学講師

法然と親鸞

B6判 二四一頁
定価 二五〇円
〒 二四円

東京都千代田区大手町一の四大手町ビルNO五四一

在家仏教協会

振替・東京 一七七六五番

(目次)

法然と親鸞

ありしがままの姿を求めて、法然の人間の真相

法然の事業と本質 (その他)

法然の言葉

日本仏教の価値

法然の事業と親鸞の役割

法然の印象

法然のなみだ、法然のいかり、弥陀の正客、その他

東京高等保育学校長
駒沢大学文学部講師

内山憲尙著

B6判 一六〇頁
予価 一八〇円
送料 三〇円

仏教保育二十章

—図解・仏教保育の理論と実際—

内山先生は東京高等保育学校、聖美幼稚園などの経営にあたり、多年、実際の仏教保育を通じて、指導理念をつかみ、それを実践されてきた方であります。本書の執筆は、六・七年前より計画され、長い間資料をあつめ想を練つた上、このほど脱稿をみたものであり、幼稚園、保育所が数においては老大なものになったにもかかわらず、適切な保育指導書を欠いている今日、まことに時宜をえたものと思います。
何卒、御一読をおねがい申し上げます。

(付録)

一、幼稚園関係法規

教育基本法、学校教育法抄、設置基準法

二、保育所関係法規

児童憲章、児童福祉法

東京都中央区京橋二の一(塩山ビル)

申込先

青山書院

振替東京九九三〇三番